
現代地上神話

大沢崇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代地上神話

【Nコード】

N 6 4 4 1 G

【作者名】

大沢 崇

【あらすじ】

異世界・剛神の戦士達が人間界に転生を果たし、それと敵対していた勢力、天馬も人間界に現れる。この世界を部隊に両者の戦いが始まるうとしていた時、別の世界から現れた何者かにより、剛神の姫・雷馬が拉致されてしまう。剛神の武将・幻不と軍師・塔画は雷馬奪還へ動き出した。

序章（前書き）

某新人賞で第一次選考通過と言う評価を頂いたものです。

それは自分の誉れであり励みでもあります。この後に書いて投稿したものは全て箸にも棒にも掛からず……。

これが最高傑作にならないように精進します。

序章

赤褐色の砂の大地。空は鮮やかな青色で、浮かぶ雲は白く綿菓子に似ている。

風が吹いて、立てられた幾つもの濃紺の旗を翻した。旗に描かれているのは、大きく開いた蓮の花。

その旗の下で、女が一人腕を組んでいた。長身で細身ながら程よく筋肉を付け、女性的な丸みと共に肉の鎧を硬質な素材の鎧で包んでいた。項で纏めた髪は

金属に似た銀色。瞳は深い海を思わせる青鋼石。右腰に携えた刀の柄は白銀に輝き、細長い刀身を包む鞘は漆黒に塗られている。女の名前は、ひよく牙翊鋼

うづが雅。先日、漸く二〇歳を踏んだばかりの若い武人である。

鋼雅は視線を四十五度、空に向けた。そして瞼を下ろし、耳を澄ませる。四方八方に立てた旗を、風が翻る音がする。その音の向こうに、鋼雅は低い音を捕らえ

た。

近いな。

「あと二千里、ってところかしらね」

鋼雅の背後に、女が一人現れた。濡れ羽色の髪を肩に流し、色白

の細い身体を包むのは葡萄色の単衣の着物。藍色の帯に、白い房飾りの着いたヒ首を挟んで

いる。

「奴等の足なら、もうすぐ決戦ね。こっちも準備に入らないと」

「そうだな」

「楽しみ？」

女のその言葉に、鋼雅は顎に手をやった。何かを考える時の、彼女の癖だ。

「楽しみと言えば楽しみだが。しかし愈牙殿、それは些か不謹慎ではないか？」

「愈牙殿なんて言わないで頂戴。前世からの付き合いじゃない？
ねえ、幻不」

幻不。その名前を聞く度、鋼雅は苦笑いしてしまう。

「牙翊幻不様は我等刃の英雄だぞ。貴殿が優の長と言えど、軽々しく口にして良い名前ではない。それは貴殿も分かっているだろう？
塔画」

突然、女　　愈牙が笑い出した。高笑いに近い。

「じゃあ言わせて貰うけど、その塔画様も、優の英雄なのよ。軽々しく呼び捨てしないで頂戴」

「参ったな」

鋼雅は頭を掻いた。その隣で、愈牙は溜息を吐く。

「全くよ。生き返ったのかと思ったたら身体が小さいし。産まれたてだし？ 記憶そのままで生れ変わった事を理解したら、産まれた家系は自分の子孫で、よりによって

生前の自分は英雄扱いなんですもの」

「自分の名前を口にする場合は敬称を着ねばならんし。まあ、天馬に産まれなかっただけ良いと思うんだな。塔画」

「様よ。塔画様。英雄なんだから」

愈牙は砂の地平線に目をやった。じきに、地平線の向こうから自分達が倒すべき敵がやって来る。今も昔も変わらない、最大の敵が。

「転生して、兵率いての戦いは何回目だったかしら」

「十回は越えているだろうな。天馬の一部は私達は何者なのか、気付いたのではないか？」

「でしょうね。戦い方がそのままだもの。それに、貴女に至っては外見もね」

長身、細身、筋肉質。銀髪と青い瞳、なんて以前と全く一緒よ。

「刃の長の基本的体型らしいな。悪くは無いぞ。脚の長さも腕の長

さも、以前と同じ程度で使い易い」

鋼雅は、自分の左腕を見ながら言った。以前と同じ程度とは言ったが、少し長いかもしれない。これからまだ成長するとも考えられる。

「速い。流石天馬だ。足は衰えていないらしい」

先程耳にした低い音が、大きくなっている。近づいて来ているのだ。

「さて、兵に声を掛けて来るか」

「必要無いと思うわよ。半鐘係りが気付くわ」

愈牙が空を仰いだとき、カーン、と鐘が鳴った。出撃を伝える鐘である。

「ほらね？」

愈牙は微笑み、袖から取り出した白い羽の扇子を手の中で弄んだ。

各天幕から、兵達が武器を携えてぞろぞろと出て来る。馬番が馬を厩から外し、兵が其々の馬を迎える。

鋼雅も、^{マント}背布を翻した。

厩から放された鋼雅の愛騎が駆け寄ってくる。自分の出番である事を理解しているのだ。それは黒い鉄の鱗に覆われ、水晶の角を持った麒麟。野を走っていた

ところを鋼雅が拾ったのだ。麒麟は人に懐かない性格の為、麒麟を駆るのは、現在は鋼雅と、過去には刃族の英雄だけ。

「行こう、てんえい 槓永。出陣だ」

鎧に足を掛け、槓永の背に跨る。

「お前とは、これで何度目の出陣になるんだろうな」

手綱を取り、右手で首を撫でてやる。

「不老不死とは、難儀ものだ」

貴女も似たようなものでしょうに、と槓永の声が脳に聞こえた。

「今度転生しても、私の愛騎をやって欲しい」

お引き受け致しましょう。槓永は笑う。

鋼雅は手綱を握り締め、集まった兵に向かい、声を上げた。

「出陣！」

それが、一番最近の前世。

第一章 天空人と天馬とその他諸々

第一章 天空人と天馬とその他諸々

1

闇夜を切り裂く一陣の風。

眠りに落ちた深夜の住宅街を、金髪の少女が走る。彼女が追うのは、中年の男だった。

女の子が男を追うというこの光景を、他人はどう見るだろう。痴漢、ストーカー、下着泥棒。何れにしても『勇気のある娘だ』と思われるだろうが、勇気の有る無しに

拘らず、彼女はその男を逃がすわけにはいかなかった。

ぴりり、と音を立てて男の背中が割れた。人間では有り得ない現象である。少女はほんの少し口元を歪めて、羽織っている白いパーカーのポケットからナイフを

三本取り出した。

走りながら、男の背中はどんどん裂けてゆく。そして、蝉や蝶が脱皮するように、中から桃色のゼリーののような物が出て来た。アスファルトに男の皮を捨てて走る

桃色ゼリー。

皮を捨てた事により、少し、足が速くなったようだ。この追いかけてつこを始めてから二〇分になるだろうか。しかし、少女の走りは全く遅くならない。

突然、桃色ゼリーが立ち止まった。行き止まりである。

「人間界の居住区は迷路みたいになってるからねえ。特にここは、世界でも指折りの大迷宮だし」

桃色ゼリーは振り返って、少女をその身体に埋まった巨大な眼球で睨み付けた。

「年貢の納め時ね。天馬^{てんま}」

紅玉の瞳を輝かせて不敵に微笑む少女に、桃色ゼリーは一度身体を縮め、そのバネを利用して飛び掛る。桃色ゼリーが宙に浮いた所で、少女はナイフを放つ

た。

ナイフを胸部に受けた桃色ゼリーは転落し、ベロン、と地面に伸びた。

有毒の水蒸気を放ちながらゼリーが沸騰する。

「聞こえるかしら？ 天馬。ああ、アンタにも名前があったわね。全く、天馬の分際でシシなんて立派な名前持ちちゃってさ。ま、その名前に免じて、このあたしがア

ンタを殺してあげる」

少女は右手人差し指を空に向けて、思いつきり叫んだ。

「バック・ドラフト！」

ボオオッ！

少女の声に、桃色ゼリー・シシは燃え上がった。地獄の業火にも見える紅蓮の光は、少女の頬にも色を着ける。

「^{ひこば}雷馬」

桃色ゼリーの大炎上にご満悦の少女の背後で、声がした。女の子の声ではあるのだが、少女のそれと比べると若干低く、少年のものとも思える声。雷馬と呼ば

れた少女は頬を膨らませて振り返った。

「でかい声を出すな。近所迷惑だ」

「何よ。見てただけのくせに」

「私が手を出したら、喜んだか？ お前」

雷馬から五メートル離れて立つ黒服の少女・幻不は溜め息を吐いた。

それに対し、雷馬はニツ、と白い歯を見せて笑う。

「ぜんぜん。寧ろ怒ったわね。目の前にいる天馬は自分で殺さない

と気が済まないの」

「好戦的なのは結構だが、民間人の目の前で力を使うのは辞める。マスコミに追い回されたいのか？」

「『緊急特番！ 本当にいた！ 超能力者スペシャル&#8252;』 なんかの手品師の前座に使われるのは嫌ね」

そう語る雷馬の頭髮が、黄金から明るい栗色に変わり、瞳も茶色に色を変える。

「でもさ、そんな事言っちゃって。幻不ちゃんは、ちゃんとやってくれてるじゃない？」

「そうだったかな」

幻不は辺りを見回した。

空中に木の葉が一枚浮いている。夕方のニュースの、「今夜は強い西風が吹くでしょう」との予報が当たって吹いた、秒速二〇キロメートルの風に煽られて樹が

ら薙り取られた葉の落下途中の姿だ。ある家の窓からは、奥様が帰ってきた伴侶に投げつけた湯飲みが空中に留まっているのが見える。時が止まっているのだ。

雷馬がこの住宅街の最寄り駅で、シシを見つけた直後に幻不が止めておいた。したがって、シシと雷馬の追いかけても絶叫も、住民は何一つ見ていないし、耳

にしていない。

「そろそろ解くか」

そう言つて幻不が二つ、手を叩いた。すると、

ガチャン&#8252;

空中にいた湯飲みが壁に激突したらしい。

「あら、お帰りなさい。遅かったわね」

幻不と雷馬の活動の拠点は、繁華街に犇く雑居ビルの一つ。一階が電気店、二階が雀荘。その三階には何も無い。コンクリート打ちっぱなしの壁に、タイル張

りの床には無数の傷がついている。嘗ては外国人が経営する飲食店が入っていたらしいが何年も前に無くなってしまい、今はこのビルの所有者である苑柳^{その}（

やなぎ）家の一人娘の遊び場になっている。

帰^{やなぎ}つて来た二人を迎えてくれたのが、その大富豪苑柳^{その}の令嬢・苑柳^柳鼎^鼎。

「雷馬が、駅前で天馬を見つけてな。住宅街まで追跡してたんだ」

「だから『時止め』を使つたのね？ 気をつけてよ。『時止め』は、能力者には効かないんだから。貴女の居場所を奴等に知らせる事に

なるのよ」

「分かつてる」

幻不が脱いだ裾の長い上着を鼎が受け取り、衣文掛けに掛ける。まるで仕事から帰ってきた夫とそれを待っていた妻のような一連の動きは、二人の付き合いの

長さと信頼が為せるものだった。

幻不、雷馬、鼎　否、塔画^{とうが}。鼎は戸籍上の名前で、幻不と雷馬にとっては塔画の方が馴染み深く、呼びやすいのでこれで呼んでいる。

この三人の付き合いは、何百年も前からになる。地球の時間に当てはめて遡ると、若しかしたら何日か前になってしまうのかもしれない。あちらと此方では時間の

流れ方が違うので、断定は出来ない。

あちらと此方。此方は、今生きている世界の事で、あちらとは言い換えれば筆筭^{ひつさん}の向こうの世界だ。名前はナルニアではなく、剛神^{こうじん}。

剛神は、火や水を自在に操り、手を使わずに物を持ち上げる等の力を持った者達・天空人^{てんくうじん}が住んでいる。その力は極稀にこの世界でも誕生する超

能力者の比ではない。特に支配階級にもなると、念じただけで山脈を一つ破壊してしまう程の力を持つ者が現れる。

天空人は、人間が日本人、漢民族、アボリジニ等様々な種類があるにも係わらず、人間と一緒にたに呼ばれるように、天空人もまた、剛神に住む者の総称である

。硝子の瞳や水晶の角、花卉の翼等を持つ者もいれば、獣と混ざり合ったような姿の者もいる。今現在分かっているところでは、剛神には三二〇種の天空人が住

んでいる。そして三人は、その複数の種族の中で、支配者階級にある種族の長だった。昔も、そして現在も。

幻不は武芸に優れた武闘派民族・刃の長。塔画は策略と智謀に優れた頭脳派民族・優の長。主に戦場を駆けるのは、この二つの種族。

しかしどうしたものか、雷馬の種族・明は舞いや音楽等、芸能には優れているが、それらが戦場で発揮された事は無かった。勝利に貢献した事も無かった

。専ら、戦場から凱旋した刃と優を迎える事が仕事。雷馬はそれがちよつとしたコンプレックスだったが、これは二人には言っていない。あくまで、自分独りの悩みだ

った。

「でも、駅前に天馬がいるなんてね。意外だね。あいつら、あんなにも人間が居る場所を避けていたのに」

「スーツ着てたしな。会社勤めでもしているんじゃないか？ この世界で生きて行くには金がかかる。人も、そうでない者もな」

「社会に溶け込んでいるのね。厄介だね。人権なんか持たれたら、狩る側としては不利ね。迂闊に手を出したら人殺しになるもの」

幻不は窓際に置かれた壊れかけの応接セットのソファに腰を下ろした。塔画は以前の飲食店の影が残る暗く広いキッチンに姿を消す。

雷馬は幻不と向かい合う席に座り、溜息を吐いた。

「溜息百回吐くと咽頭癌になるぞ」

どうした？ 走り回って疲れたか？

幻不は微笑する。しかし笑っているのは口元だけだ。人間の女の胎から産まれた為に前世とは色の異なる漆黒の瞳には、雷馬の身を案じる、そんな光がある。

「あたしね、思うのよ。あたし達は何の為に、この世界の人間として産まれたんだろう、って」

「何だ、唐突だな」

幻不は年齢にしては長い脚を組んで、先を促すように雷馬に掌を見せる。

「唐突なんかじゃないわ。いつも思っていたわよ。あたし達は二回転生してるけど、前世の記憶は全部持って来てる。最初は剛神の間で、それぞれの部族の長

だった。前回もそうだったでしょ？ でも今回はあたし達、剛神の人間ではないわ。この世界の人間なのよ。でも、前世もその前のも、

記憶は全部持つてる。剛神で

も、あたし達は長として扱われているわ。じゃあどうして、前回みたいに剛神に生まれなかったのかしら」

何故、役立たずのあたしが一緒に転生したのかしら。それは、思っても言わなかった。

「『じょおう』って、知ってるか？」

「女王？ クイーン？」

幻不は左の人差し指を空に走らせる。草書体の二文字。

「いや、女の皇帝と書く。でも女帝ではない。あくまで、おんなすべらぎ女の皇。
簡単に言えば、シナリオライター書き手だ」

じょおう女王。初めて聞いた単語だった。勿論、書き手の一般的な意味は知っている。しかし、女王（簡単に言つと書き手）とは、果たして何者だろうか。

「世界 それは剛神もこの世界も、全部含まれてる。私達が知っている世界も、知らない世界も全部だ。その歴史は、全部こいつが動かしている。この日何処で

何が起きるとか。何処で誰が何を言つ、とかな」

幻不の話はこうだった。

女皇とは世界の歴史を支配しているモノの事で、それは強大な力

なのか人物なのかそれは特定されていないらしい。全ての生物に降りかかる不運や災難。幸

運や偶然。それを全て動かし、支配している。つまり、明日の自分の命は、女皇に掛かっているのだ。女皇が何を考え、その時どんな気分なのか。それで歴史が

変わる。

学術的根拠は無い。一種の、信仰対象だ。全知全能なる神は、人間が「存在している」と言わなければ存在しない。聖書も世界遺産の礼拝堂も、全て神ではな

く信じる者が造った物だ。実体が無いものは、信じ、存在を誰かが主張しなければ姿を持たない。女皇もまた、万能なる神と似たものだ。大規模な信仰ではないが

。

この女皇信仰は、三人が最初の天命を全うしてから二度目の命を貰うまでの間に剛神の極一部の神官達の間で生まれ、民間に広まる事なく、戦場に携わる者

達に移ったのだという。だからこそ、二度の人生の中で両手で数えられる程度しか戦場に携わらなかった雷馬の耳には入らなかったのだ。三人の中で一番短命

だったというのも、あるかもしれない。長く生きていれば数多く戦場に携わる事も出来ただろうし、女皇の話を目にする機会も沢山あっただろう。

「だからその時歴史が動いた閃きも、町工場から世界に飛び立った挑戦も、大惨事もそれこそ神様の気の赴くままなのさ」

「じゃあ、あたし達がこの世界に生まれたのは、女皇の悪戯なの？」

「言つたろ？ 女皇は簡単に言うと言き手だつて。だから世界の歴史は女皇の書く物語なんだ。そして私達はその物語の登場人物。気紛れや悪戯で、勝手気儘

に登場人物を動かしていたんじゃあ、後から多かれ少なかれ問題が出てくる。死ぬべきだった登場人物がまだ生きていたり、子供が来ている筈なのに出来てい

なかつたり。そうなると、辻褄合わせにこれからの設定を変えなくてはならなくなるし、少なからず苦勞もするだろう。書きたかったシーンも御釈迦になるかもしれない

い。だから、女皇は少し考えて書くんだ。伏線と言うかな。誰かの行動の意味が、後で分かるようになる」

そこまで真剣な顔で喋っていた幻不が、突然ニヤリ、と笑った。

「剛神で私達に全滅させられるべきだった天馬が、どうして最近、それも私達が産まれる少し前から、人間界に現れるようになったのか、気になった事はないか？」

「若しかして、物語の展開の為？」

「物語は戦場を移して急展開さ。天馬は剛神を支配出来なかったか

ら、その代わりにこっちの世界を支配しようとする。奴等としてはその気なんだろうが、女皇はそ

んな目論みで天馬を人間界に下ろしたんじゃない」

最終的に女皇がどちらを勝者とするのか分からないが、

「剛神での今までの戦いを第一章とするならば、これから始まるのは差し詰め第二章といったところだろう。それが私の見解だ。かなり無理矢理なこじ付けだが、こ

れなら今迄剛神に産まれていた私達が人間界で産まれても、変ではないだろ？」

「その話が本当なら、貴女が話した事は一言一句、全て女皇の筆によるものになるわね」

塔画がキッチンから出てきた。手には丸い盆があり、その上には湯気を立てる白いカップが三つ乗っている。

「そうなるな。誰かが女皇の存在に気付いて、そのシナリオから逃れようと考えて動く事も、女皇の考えた事だ」

では、何もしなくても女皇が動かしてくれるのだから、自分達は何も考えなくても良いのではないか。雷馬はそう考えた。それを打ち明けてみると、幻不は、

「お前がそう考えるのも、女皇が書いた事だ」

どうやら、女皇の筆から逃れる事は出来ないらしい。人間誰しも、

運命からは逃れられない。その日その時牛乳を飲んだのも、机に手をついたのも、全てが運命

であり、女皇の文章。全ての出来事が、運命。

「わたし達は女皇が何を書いたとしても、先のページは読めないわ。振り返って前のページは読めても、今、目の前にあるページを読まない限りは先を読んでも分

からないものね。だから、これからの事を話し合いましょうか？」

塔画は二人にカップを手渡し、雷馬の隣に腰を下ろした。カップからは、甘い花の香りが昇ってくる。

「昼間、天馬の動向調査に当たっているメンバーから報告があったの。スマリの軍が、浅木町あきまちで発見されたらしいわ」

「そうになると、こっちも本気で動かないといかん」

スマリとは、元来集団生活を好む天馬の中にある 軍隊とも言える一つの集団のリーダーである。

天馬とは一言で言うともンスター的事で、桃色ゼリーがそれである。グリフォンやハーピー等その形態は様々だが、剛神で生まれたもう一つの種族だ。

天空人はそれと戦う事が第一で、天馬との殺し合いが本能だと言っても良いだろう。どちらかが全滅しない限り何も始まらないし、終わらない。今二つの種族の

前に置かれた選択肢は、戦う事、殺しあう事しか無い。この先に何があるのかは知らないが、兎に角、今やるべき事は一つしか無いのだ。両種族の和平など、考

えるだけ時間の無駄だ。有り得ないのだから。

「スマリの軍は、以前スマリと他数匹の兵を残して壊滅したわ。でも、」

「お礼参りか？」

「でしょうね。特に貴女には、恨みがあると思うわよ」

「スマリの旦那さん、倒したのは燐雅ちゃんだもんね」

「子供のやった事は親が責任取れて？」

「基本的には、そうじゃない？」

「しかしな」

今の幻不に子供はいない。つまり前世での話だ。

「その時、燐雅は十九歳だったんだぞ？ もう立派な成人だったし、長になっていたし。親の責任どうのと言う歳じゃなかった」

「そうになると、親の教育がなってない！ と来るのが世の常よ」

なんて無茶苦茶な！ 幻不は微かに眉を顰めてお茶を啜った。夫に先立たれた為、子供の教育には人一倍気を遣ったし努力もしたが、

片親というのは何処でも

苦勞するらしい。

「それで、二百年で軍を作り直したのか？ スマリは」

「天馬には百年や二百年は大変な時間ではないもの。細胞一つと時間が十分もあれば、奴等は幾らでも複製クローンを作るわ」

「そうになると、今回は先鋭部隊になつて可能性があるな。優秀な奴の複製を作れば良いんだから」

しかし、確かに複製は強いが、オリジナル素体に比べると身体が弱い。産まれる時は赤子の状態ではなく、戦士として戦える程に成長した姿で誕生するが、誕

生して三日もすれば空氣に押し潰されてしまう。断続的に何体も作つていれば良い事なのだが、複製を作る事が出来る天馬が生まれる確率は千体に一体。それ

は其々の持つ個性のようなものらしく、複製を作る能力のある者の複製が、必ずしも同じ能力を持つているとは限らない。持つていられたら、それこそ天空人には

致命的だ。その辺り、女皇は平等に設定しているようで、正直助かる。

「数は、どのくらいなんだ？」

「とんでもないわ。立派なテロね」

スマリ軍の数。それを口にする前に、塔画は唇を噛んだ。

「町一つ、天馬に摩り替わっているらしいわ」

それに続いたのは、幻不の壮大な溜息だった。ソファに深く身を沈めて、頭を抱える。

「最悪だ。奴等本当に人間社会に溶け込みやがった」

「それも元からいる人間に成り代わったのよ。本人が何処に行ったか、考えたくもない」

「考えるまでも無い。奴等の事だ」

生かしておく筈が無い。今頃縁の下に居るか、それとも消化されたかのどちらかだろう。

「それを全て狩となると、会社勤めのを狩るより厄介だな。町一つ無くなる事になる」

「今まで極力目立たないように動いて来たけど、今回はそれも難しいそうね」

剛神の武将と軍師が、まるで陣営の天幕にいるような会話をするのを、雷馬はカップ片手に眺めていた。眺めながら自分の無知を恥じていた。

天馬は、ただ狩れば良いだけのものだと思っていた。目の前に居たものを狩り、最終的には全滅させる。それが最善だと思っていた。

だから駅前でスーツ姿の天

馬を見つけた時、すぐに追い駆けたのだ。

剛神でならそれでも構わなかったのだろうが、ここは剛神ではない。猿から進化した、力の無い人間の住む世界である。徒党を組む事を本能としている彼らが自

分達とは異なる者を見つけた時、どのような行動をとるのかは、考えるに及ばない。だから、幻不は『時止め』を使ったのだ。幻不が居たから、住宅街の人々は何も

知らない。何も知らなかった。

駄目だね。あたし。

そして再び溜息が出そうになって、カップを口元に運ぶ事でそれを堪えた。

「まあ、良さ」

幻不はソファから立ち上がった。

「今夜は事務処理しなくてはならなくてな。徹夜になるかもしれん」

「事務処理？ 何の？」

「書類製作。事務処理と言うよりも、文書処理だな」

何の？ とは聞かなかった。幻不は聞いても答える事と濁す事が

はつきりしている。尋ねて答えるくらいなら、始めから、「の書類を作るから今夜は徹夜だ」と

言うからだ。

「これから夜食を作ろうと思うんだが。どうする？」

お前らも食べるか？

それを聞いて、雷馬の中の暗く淀んだ空気が吹っ飛んだ。

「食べる！ 走ったから夕飯のカロリー消費しちゃった」

「頂くわ。育ち盛りだからかしら。最近お腹が減るのよ」

「分かった。何か、特別に食いたい物はあるか？」

「任せる！」

「塩分とかカロリーとか、余計な事は気にしないで頂戴」

「誰が気にするか。そんな面倒な事」

ソファにジャケットを脱ぎ捨て、シャツの袖を捲くりながら幻不はキッチンに消えた。

2

山椒を混ぜ込んだ白味噌が乗った筍の丸焼き。茹でた芹を鶏のさ

さ身で巻いた物。蒭と豚肉の炒め物に、蒭の薑の Pasta。

「季節感満点なメニューだね」

朝食の残りのヒジキの煮物を摘みながら、雷馬は焙じ茶が湯気の立てる湯呑みを傾けた。

「実家から送って来たんだ。旬の物だし、悪くなる前に食ってしまおうと思っとな。筍は特に、時間が経つと硬くなるから」

幻不が空になった雷馬と自分の湯呑みにお茶を注ぐ隣では、塔画が常人離れた速度で料理を片付けている。箸の運び方は非常に上品なのだが、料理を口

に運び飲み下し、再び箸を着けるまでのスピードが速い。そして、

「御代わり下さい」

食す量が多い。

「相変わらず大食いだな。暴飲暴食はよくないぞ」

「食欲旺盛、と言って欲しいわね」

「その身体の何処に、Pasta十五束と筍三本と蒭豚炒め三皿が入るんだ？ 以前の半分の大きさも無いだろう？」

蒭の薑の Pasta で富士山が築かれた皿を受け取り、塔画は首を傾げた。

「そうなのよね。生まれてからまだ十何年しか経ってないから身体が小さいのは仕方が無いんだけど、食べる量には変化が無いのよ。年齢的に育ち盛りなんだし、

まあ、仕方無いわね」

「大食をそれ一つで片付けるな」

お茶を一杯飲み干して、幻不は箸を箸置きに横たえた。

「あら、もう終わり？ 貴女は随分小食になったみたいね」

「便利な身体になったもんだ。飯一膳と一汁一菜で充分腹が膨れる」

修行僧でもあるまいし、成長期なのだからもっと食べよ、と、雷馬と塔画は思った。

「まあ、素敵。その身体のご両親はどんな方なの？ わたし、まだご挨拶に行っていないのだけれど」

「普通の人間だ」

続きを語る直前、幻不の表情が曇った。

「もう亡くなったがな」

「……」

「そう」

芹のささ身巻きを口に詰め込んでいた雷馬も、むっ、と眉を顰めた。塔画は無表情のまま、顔をほんの少し下に向ける。そして何もなかったかのように、再び路の

臺の Pasta を口に運び始めた。

「矢張り、逃れられないのね。犠牲は」

「運が無い夫婦だった。初めての子供が刃の長の転生体だったというだけで、気色の悪い生物に殺されたんだからな」

気色の悪い生物。幻不はそれを天馬であると公言しているが、実は、幻不の両親の死に、天馬は関与していない。天馬は倒すべき宿敵だが、それ以外にも

戦うべき相手は居るのだ。天空人を有効利用しようと目論んでいる者達が。それらによって両親を失った幻不は現在、幻不の転生と前後して此方の世界に渡って

きた刃の臣達の元にいる。表面上は養女に行った事になっているのだ。

「気を付けろよ。お前達の両親がマークされていないとは限らないからな」

「大丈夫よ。お父さんとお母さんには那菫なんしょうと柚楠ゆなんがいるもの」

「うちも、皆付いているから大丈夫だよ」

那菫、柚楠、皆。それらは全て此方に渡って来ている臣達。此方

には、文武に優れた者達 所謂選抜チームが渡って来ている。彼らは隠密活動を始め、長

に関わっている人間を密かに警護している。

転生の繰り返しで長く生きているとはいえ、幾つもの天馬を狩っているとはいえ、良心は消滅していない。そのいつまでも在り続ける三人の良心に付け込んで、

両親を人質に取るなど。奴等がしないとは限らないのだ。

そして何より両親はただの人間だ。幻不が言ったように、運が悪かったのだ。その運に恵まれなかった両親を、この戦いに巻き込むわけには行かない。

天馬は殺す。全滅させる。そして両親は巻き込まない。

幻不は膝の上に肘を付き、指を組んでそれに顎を乗せた。

3

飛び散る体液を防ぐ為に腕を翳す。袖に飛び着いた生臭い液体は、一度ジェル状になって、間もなく石のように硬い物体に変わって袖から剥がれ落ちた。

ここは報告のあった浅木町。あれから夜明けを待たずして幻不は動いていた。時刻は午前四時三十分。既に東の空は明るい、日の出まではもう少し掛かるだ

ろう。目の前には、住民と入れ替わった天馬達が迫っている。幻不はそれを片っ端から斬り倒していた。サバイバルナイフで首を跳ね、頭から一刀両断にし、腰か

ら上を切り離す。背後に周り、迫ってきた奴は超微弱の衝撃波を放って挽肉にしてしまう。あまり強い力を放つのは、自分の居場所を知らせる事になるので出来る

だけ控える。まったく、何処までも敵ばかりだ。

「大人しく死ね！」

物騒な事を吐き捨て、小学生の姿をした天馬を斬り倒す。誰も何一つ語らず、ただ幻不を殺す為に立ち向かい、そして斬られて行く。

何て虚しい生だろう、と幻不は思った。死ぬだけの、殺されるだけの魂などあまりにも虚し過ぎる。それと向かい合う自分は、二度も生まれ直しているというのに。

複数の天馬と戦うとき、幻不は戦いに集中しない。肉体はおぞましい殺戮を行い、思考は別方向を向いている。いつも、自分が殺した者の魂の行き先を考えて

いるのだ。天馬も、輪廻の輪に乗る事が出来るのだろうか、と。その場合、次は何に生まれ変わるのだろうか、と。どうせなら、もう二度と天馬には生まれないうで欲しい

とさえ考える。

天馬相手に、私もそんな優しい事を考えられるのだな、と迫って来ていた天馬を全て処分して、ナイフをベルトに固定した鞘に収めながら幻不は一人で笑った。

しかしその自嘲気味の笑いが、一瞬にして凍りついた。足元に転がる天馬の首が、バチリ、と目を開けたのである。

殺し損ねたか？

「……じん、の……長、殿……」

唇を僅かに動かしながら、首は目をキョロキョロさせて幻不を探した。

「何だ？ イツ」

それはこの首の名前。天馬と向かい合った瞬間、相手の名前が分かる。心に響いて来る。多分、天馬の方も同じだろう。そのとき、どの名前が相手に伝わるのか

は分からないが。

「お、気を付けて」

「何の事だ？」

首は口から鼻から耳から、玉虫色のジェル状の液体を拭き溢し始めた。この首も、じきに壊れるだろう。

「我々、と違う……モノ、が。わた、て。きました」

我々と違うモノが渡ってきました。だと？

「おそろ、しい力を。よびだ、そうと。しています」

「それは何か？ 私達を陥れる為の虚言か？」

「ここ、はセン、ジヨウ。我々と、あなた、達の戦場」

「そうだな。私達とお前らの戦場だ。そこに、邪魔者が入ってきたのか？」

幻不はとても穏やかな口調で、イツと話をした。左手はナイフの柄に置いている。

「あなたは気付か、なかったかも、し、れないが。我々は気付いた。アレは」

「あなた達を喰おうと、して、いる」

「成程。しかしイツ。お前、それを私に教えて良かったのか？」

そいつ等が私達を食い尽くせば、剛神は自動的にお前達の物になるのだぞ？

しかし、この一族の存続と全てを賭けた戦いに於いて 手段は問わない癖に、天馬は非常に紳士的だ。戦いの邪魔をするものを嫌う。自分達以外の者が天

空人に手を掛けるのを嫌い、同時に天空人以外に殺されるのも嫌が

った。

「あなた達を、殺す、のは。私、たち。邪魔、させない」

「そうか。有り難う」

幻不はイツの首に、ナイフを突き立てた。

玉虫色が飛び散り、結晶となってアスファルトに散らばった。

「成程」

私達を喰おうとしている者、か。

幻不はナイフを再び鞘に収め、唇を噛んだ。

他種族・他世界の事情については、天空人よりも天馬の方がアンテナが高い。幻不達がそれに気付くより、早く気付くのだ。正直なところ、幻不は他種族に疎か

った。剛神と、この世界の他にどんな世界があるのかも、天馬達程の知識は無い。一応勉強はしているが、別の世界の住人と対面した事も数える程度しかない。

「お久しぶりです。刃の長殿」

女の声がして、幻不は振り返った。

そこに居たのは三十代半ばの女性で、緩いウェーブの掛かった黒い髪を後頭部で纏めている。身に纏っているのは柔らかな素材のワ

ンピースで、裾からは細い

足首が見えている。足元は真新しいサンダル。ワンピースの上には向日葵柄のエプロンを着けていて、明らかに団地妻の出で立ちだ。しかし、幻不は彼女が人間

ではない事を知っていた。当然である。この町は、全て天馬・スマリの軍に乗っ取られてしまったのだから。従って彼女も天馬になるのだが、産み分けが違うとか何

とかで、イツとはまた異なった天馬だった。

隊長・スマリ。その人である。

「久しぶりだな、スマリ。彼此、二百年ぶりか？」

「そのくらいになりますか。貴女は、だいぶ小さくなってしまいました。霧困気は以前と全く変わりませんね」

「そうか？ でも仕方が無いのさ。この世界に生まれて十年と少ししか経ってないんだ」

「何故貴女は、転生する事が出来るのですか？ 記憶はそのままで」

「それは私も気になってる。しかし、女皇に尋ねる術も無いからな」

スマリは一度、自分の夫の仇を前にしているとは思えない程穏やかで優しい顔になり、それから直ぐに戦士の顔に戻った。

「刃の長殿。貴女が私達を殺したいのは分かりますが、今は」

「邪魔者の処分、か？」

「ええ。長より、私はその任を仰せ付けられました。この戦いの邪魔をする者を、消滅させよ、と」

「それは助かる。その邪魔者とお前らと、両方相手にするのは辛いと思ってたんだ」

「では、一時休戦と行きますか？」

「ああ、その方が助かるな。でも、どうせ手を組むのは、出来ないだろう？」

今は幻不もスマリも、戦いよりも邪魔者を排除する事を望んでいる。どうせ目指すものが同じならば、手を組んでもよいのではないか。そうは思うが、

「それは、貴女のお仲間が許さないでしょう？」

「そうだな」

天馬と手を組むのは、御法度だ。

「また会おう、スマリ。その時は、容赦無く殺すぞ」

「では全軍率いて応戦しましょう。その時まで、死なないで下さい。長殿」

お前もな、と言う代わりに手を振り、幻不は浅木町から一瞬で姿

を消した。

*** **

「シア様の居場所は？！ まだ分らないのか？！」

蛍光灯で真つ白に照らされた細長い廊下を、裾が踝まで届くコー
トを羽織った背の高い男が歩いている。長すぎるとも思える美脚が
繰り出す一步は大きく、回転

を少し速めると、後ろに付いて来ている部下達は走らなければ付い
て行けなくなる。

「彼方此方で能力の波動は感知されるのですが、移動が素早いもの
ですから……」

「言い訳はもういい！」

張りのある低音で一喝され、部下達は縮こまった。

「この街の何処かにいらっしゃる筈だ！ 一刻も早く探し出せ！」

4

朝を迎えて塔画は学校へ向かい、雷馬はもう一眠りすると布団に
戻り、幻不は一人、リビングとは名ばかりの古いソファとテーブル
の並ぶ部屋に居た。

あれからすぐに帰って来て、二時間ばかり寝た。前世もその前も、

人生の半分以上を戦場で過ごして来た幻不にとって二時間の睡眠時間は贅沢品だった。

しかし、邪魔者の事を全て天馬に任せるわけにはいかない。これからまた、眠れない日々が始まるのだろう。そう思うと、今は寝ておこうかという気になり、幻不は

ソファに横になった。ソファの背に掛けていた今朝着ていた上着を背中に掛け、目を閉じる。眠りに落ちるには三分もいらなかった。

「幻不ちゃん！」

遠くに雷馬の声が聞こえたような気もするが、空耳か、夢かと思つて気にはしなかった。

「幻不ちゃん！」

二回目。そして三回目は、

「幻不ちゃん！ 起きて& a m p ; # 8 2 5 2 ;」

あまりにもはつきりと聞こえたものだから。

「……何だ？」

幻不は起き上がった。

辺りを見回す事も無く、幻不は状況を判断した。

自分の顔を覗き込むようにソファの脇に立つ雷馬の隣に、馴れ馴

れしく寄り添うように立っている一人の男。その男に、幻不は嫌になるほど、面識があった。

「エニ」

「久しぶりですね。シア様」

男・エニは栗色の髪をひっ詰めて後頭部で束ね、その逞しい肉体を何処かの軍服のような赤黒い衣装で包んでいた。上着は裾が踝まで届く長い物。両肩に金

の飾り紐があり、胸には意味が分からないけれども無数の勲章が付いている。街角やイベント会場でよく見掛ける軍服マニアのようだ。

「何用だ？」

「それより先に、言うべき事があるでしょう？　ワタシに」

「さて、何の事かな？」

「シア様」

親友と来客の間に突然散った火花に、雷馬は居心地悪そうに肩を竦めた。

「あもう。お茶でも、いかがでしょう」

そして、その場しのぎの社交辞令を吐いてみた。

雷馬が見るに、エニと呼ばれた男は幻不と面識があり、何度か幻

不と塔画が話していた奴等にあたるのではないだろうか。その奴等はてつきり、天馬の事だと思

っていた。しかし天馬には能力の放出量を控えるまでして、自分の居場所を隠す必要は無い。寧ろ、ある程度の所在を知らせておいても構わない相手だ。

若しエニが幻不を追う能力者だったとしたら、そして幻不の命を狙う悪者だったりしたら！

どうしよう。

逃げるように飛び込んだキッチンでお茶を煎れながら、雷馬は迷っていた。リビングの二人は一言も喋らずに、相変わらず険悪なムードが漂っている。塔画に電

話をしようにも、今は授業中だろうし、それに今日から中間試験だとも言っていた。邪魔をするわけには行かない。

ここは、自分で何とかしなくては！

雷馬はうん、と胸を張ると、ティーカップを乗せた盆を手にはリビングに戻った。

リビングの二人の間に漂う険悪な空気は、最早致死量を軽く超えていた。心臓の弱い人をこのリビングに連れて来たら、三秒で天に召されるだろう。

「探しましたよ。シア様」

エニはその飴色の瞳で幻不を見詰めている。少々怒りを孕んでいるようにも見える。

「その名前は一体何処から来たんだ？」

それに対して幻不は未だ眠いのか不機嫌そうな眼をしている。かなり不機嫌なようだ。

「柘榴の神子の麗しきお名前ではないですか。貴女の名前ですよ」

幻不は苦い顔をした。柘榴の神子みこなど自分には身に覚えの無いことである。

「ワタシの『エニ』も、貴女が付けて下さった聖なる名前ホーリーネームではありませんか」

覚えていらつしやらない？ とエニは首を傾げる。その仕草に、幻不は眉間の皺を深くするばかりだった。

「覚えていない、も何も。お前の言う柘榴の神子は多分、私ではないぞ」

「何を仰います！」

Bannon & # 8 2 5 2 ; エニはテーブルを叩いた。その衝撃によってテーブルの上に置かれていた青いガラスの一輪挿しとそれに乗せていたレースのソーサーが、一瞬浮き上

がる。それをキッチンの入り口で見ていた雷馬は「うわぁ」と肩を竦めた。一輪挿しに何も入っていなかったのは何とも嬉しい偶然で

ある。

エニは右手を挙げた。

殴るのかと思った雷馬はウツと目を閉じる。しかし何も音はしなかった。恐る恐る瞼を持ち上げてみると、エニは幻不の左耳に掛かる髪を除け、左耳を摘んでいた。

。

「これが！ コレが何よりの証拠ではありませんか！」

それは緋色の結晶だった。幻不の耳にいつもぶら下がっている物だ。ピアスでもイヤリングでも、マグネットピアスでもシールでもない。耳朶に直にくっ付いている

のである。

「これは柘榴の神子がお持ちになっているとされる、柘榴水晶つくりすいしょう！ それ以外の何物でもありません！」

「変な妄想をするな！ いい年こいて！ いい加減目を覚まさんか
& amp; ; # 8 2 5 2 ; ,」

ヒートアップする幻不とエニ。雷馬はすっかり入るタイミングを失っていた。

「まったく」

幻不はエニの手を払い除け、その左手で入り口を差した。

「もういい！ 話しても無駄だ。出て行けエニ。お前のように落着きの無い者がいると雷馬が怯える」

「な、何ですと?! ワタシは貴女をお迎えに来たのですよ?!」

「それが何だ。私は迎えに来てくれとは一言も言っていないぞ。出て行け」

しかしエニも引き下がらない。

「シア様！」

必死に食いつくのだが、

「出て行けと言っているんだ！」

一瞬、ぐわり、と家具が浮き上がった。幻不の瞳は真つ青に燃え、髪は銀に輝いた。それには流石のエニも青くなる。

「わ、分かりました。……でも、次は必ず連れて帰りますからね！」

言い捨てると、脱兎の如く逃げ出した。

しかも何とも情けない内股走りで。

「まったく」

エニが出て行ったドアを一瞥し、幻不は溜息を吐いた。そしてどっかりとソファに深く腰を下ろす。

「すまないな。見苦しいところを見せて」

「別にいいけど。何なの？ あの人」

幻不の両親が亡くなっているのは昨夜聞いたが、あんな関係者がいるとは知らなかった。

「最近出て来た宗教法人さくろかい柘榴会の教主だ。一応能力者ではあるが、天空人ではない。人間の間に稀に生まれる、超能力者ってやつだな。霊能力者

とも言うか」

新興宗教家。悪徳宗教ではないようだ。毒ガス散布や足裏診断などをする宗教であつたなら、幻不は「性質の悪いカルト教団だ」とはつきり言う。幻不がただの

新興宗教で片付けているだけ、まだ安全な宗教らしい。

「幻不ちゃんの、親戚？」

「私の母方の祖父の弟の息子の嫁の弟の息子だ」

雷馬の頭の中では、高速で一つの家系図が描かれた。その図からするとエニは、

「幻不ちゃんのお母さんから見ると、従弟の甥、になるのかな？」

「私から見るとハトコ、にもならんな。だが、遠すぎるが、私の数

少ない親戚だ」

血の繋がりは皆無だがな。

幻不は左耳に手をやった。そこにはエニが柘榴水晶と呼んだ結晶がある。

「これは私が母の腹から出て来た時から着いていたからな。あいつはコレを神聖な物だと思い込んでいるらしい」

豪い迷惑だ、と幻不はエニを思い出したのか眉を顰めた。

幻不が言うには、その結晶は何の能力も無いただの石らしい。ルビーだとかガーネットだとかそんな立派な宝石でもないし、かと言って血液の塊でもない。母胎

の中にはそんなモノは無いわけだし、その石が何処から来たのか。それが謎なのだ。しかし、謎はあるが神聖な物でもない。ただの塵のような物だと、幻不は考え

ている。

「でも、仕方無いんじゃない？ 宗教家なんだしさ。許してあげなよ」

エニがあれほどまでに幻不に執着するのは、幻不の柘榴水晶の為だけではないだろう。他に守るものがあるのならば、血も繋がっていない遠すぎる親戚の子な

ど存在さえも知らないだろう、と雷馬は考えた。

「分かってあげてもいいと思うけどな」

寂しいと思うよ？

何とも優しい雷馬の言葉。エニが聞いていたら、「そうでしょう？　そう思うでしょう？」と言って涙を流していただろう。しかし、

「お前な」

幻不は不機嫌そうに、それでいて呆れたように頂垂れた。

「恐ろしい事言うなよ。考えてもみる。あいつは私を柘榴の神子だと思い込んでるんだぞ？　あいつの所に行ってみる。私は柘榴の神子として祀り上げられ、そ

の上、四六時中隣にあいつが居るんだぞ？　これ程までに恐ろしい事は無いだろ？　胃に穴空くのも時間の問題だ！」

そこまで言う事無いんじゃないの？　と雷馬は思った。しかし、幻不としては考えるだけで寒気をする事だったらしい。ブルブルと震えている。恐ろしい事を考え

て身震いする。何とも、人間のような動きである。ああ、人間だったか。

「まあ、いいだろう。あの男の始末は近いうちにおくとして」

幻不は物騒な言葉を吐いて、ソファにごろり、と横になった。

「暫く寝る。何かあったら起こしてくれ」

「了解」

そして再び眠りに戻って行く。

5

私立紫苑坂学園中等部女学部。ここに塔画は通学している。

たとえ剛神で優の長という地位にあり、権力を持っていたとしても、この世界では一人の子供に過ぎない。その為、社会の流れに逆らう事は出来ないのだ。義務

教育を受け、保護者の監視下で生活し、学校の行事に参加する。

どうしたものか、この世界ではその流れに逆らおうとすると迫害される。社会から追放される。口では、「団体活動って嫌いなもの」そう語っていても、徒党を組んで

誰かを迫害する事を楽しんでいる。

まったく、この世界の生き物はよく分からない。

塔画は窓際の席に屯している級友達を一瞥して、鞆を片手に席を立った。

試験期間中は大体午前中で授業が終わる。二時間試験をして、それから明日の科目の勉強をする為の時間となる。今日は現代国語と

生物の試験だった。

「ねえ、どうだった？ 現国」

「書けるだけ書いたけど、当たってないよ、全部」

「え！ 書けたの？ アタシ白紙なんだけど」

試験後の学生の会話としては、定番の内容だ。

「あのさー」

そして突然内容が変化するのも、けして珍しい事ではない。

「苑柳さんって謎だよねえ」

「クラスではあんまりお話ししないし」

「家が金持ちだからって、お高くとまってるのよね。家でも学校でもワタシはお嬢様！ みたいなさ」

その会話の内容がクラスメイトの悪口なもの、よくある事だ。

彼女達の会話は、塔画の耳に全て届いていた。聞きたくて聞いていたのではない。聞きたくもない事を、耳が拾ってしまうのだ。

転生して体が代わっても、以前の視覚・聴覚・嗅覚は健在らしく。果てしない海や森林、砂漠ばかりの剛神とは違い、人間と機械の満ち溢れたこの世界では

音ばかりが耳を突く。塔画は右耳に触れながら、美しいステンドガ

ラスが聳える昇降口へと階段を下りていた。

塔画は学校が嫌いだった。この世界の事を学ぶには学校に通うのが一番手っ取り早い。それに、子供が義務教育を受けるのは社会の流れとして自然な事だ。

しかし、実際通ってみるとそこは野望と欲望の入り混じる混沌の世界で、学ぶものも、学ぶに値しない事ばかりだった。

方程式？ 三角比？ 枕詞？ シク活用？ そんなもの、塔画は既に知っていた。この世界の教育機関で学ぶ事は、剛神の教育機関のものと殆ど変わりが無い

。ローマ字は初めて見たが、教科書を読めば理解出来る。一度理解してしまえば、あとは応用だ。理解してしまえば、教師の話など聞くに及ばない。

下駄箱で靴を履き替え、塔画はふ、と溜息を吐いた。

これからどうしようか。

明日は土曜日。学生にとっては休日である。今日は天気が良い。空は青く晴れ渡り、柔らかな綿雲が気持ち良さそうに浮いている。気温は暑からず寒から

ず。不快にならない程度の風は、軽やかに木の枝を揺らしている。

桜と海棠が散り、今は藤が盛りを迎えている頃。先日立派な藤棚のある公園を見つけたのだが、今頃は見事な紫の灌が出来ているだろう。

よし。塔画は 多分 暇をしているだろう二人を連れて、そこに花見に行こうと考えた。スコーンを焼いてジャムとクリームとメープルシロップを持って、幻不

は未成年のくせにまだ以前の癖を引き摺っているから果実酒の一本でも持って行こうかな？ なんて一人楽しく計画を練りながら本拠地へと歩き始めた。

6

その頃、雷馬は雑居ビルの外にいた。

「お話したい事がございます」

女の声が聴こえたのだ。聴こえたと言っても、鼓膜が振動したのではない。脳に直接響いて来たのだ。

この世界の普通の人間には、こんな芸当は不可能だ。これが出来るのは相当な能力者、若しくは天空人か天馬しかない。それ以外にしているとしたら、自分達と

同じく別の世界から渡って来た者だろう。その声は余りにも強烈な波動で、暫く経った今でも頭がズキズキしている。あらゆるモノに敏感な幻不が起きなかったのだ

から、多分、自分だけに送られたものなのだろう。そう判断し、雷馬は眠る幻不に一言、

「出かけてくるね」

そう言って部屋を出て来た。幻不は寝耳に語られた話を全て記憶出来るので、大丈夫だろう。何とも便利な身体である。

雷馬は繁華街を抜けて大きな橋を渡り、町外れの公園に来た。そこは高台になっていて街を一望出来る。何本もの染井吉野が植えられていて、春は花見客で

賑わうが、葉桜となつた今は人の姿は無い。しかし、相手はここにいる。自分と呼んだあの波動は、ここで途絶えている。あの波動には、一瞬で千里を越えるだろう

と思える程の力があつた。それが、何かの介入で何処かで消滅するとは考えられないし、それ以外で途絶えたとしたら、そこが発信源である以外に有り得ない。

「出て来て」

雷馬は人のいない公園の中心で声を発した。

「望み通り来てあげたわ。姿を現しなさいよ」

すると目の前に佇む、錆付いた遊具の陰から、青いチャイナドレスに似たデザインの服に身を包んだ女が一人現れた。今まで遊具の背後には真新しい木製遊

具の姿しか見えなかった。それに隠れていたにしては、出方がおかしい。しかし、雷馬は気にしなかった。遊具の後ろに別の空間から転移したただけなのだ。自分

達もよくやる移動方法なので不思議には思わなかった。相手が能力者である事は知っているのだから。

「お初にお目にかかります。天空人の姫君」

姫君。女の言った多分雷馬を指すものだろう代名詞に、正直吹き出しそうになった。姫君として扱われたのは、最初の一時期だけだったものだから、何とも懐かしく感じた。

しく感じた。

「あたしをそう呼ぶのなら、貴女はあたしが何者なのか知っているのね？」

「はい。私共は何百年も前から、貴女様の事を存じ上げておりました」

「そう。じゃあ名乗る手間が省けたわ。誰なの？ 貴女」

女は曇った空のような色の眼で、雷馬を見詰めた。その眼に生氣は感じられず、深く澱んでいる。

「貴女様は、何故、天空人と名乗っていらっしゃるのですか？」

自分が投げ掛けた問に、あまり適切ではなかった女の返答に、雷馬は一瞬「質問に答えなさいよ！」と怒鳴りそうになった。しかし、冷静さを引き止め、律儀に答

えた。

「自分から名乗った事は一度もないわ。ただ、あたし達の居城は空に浮かぶのよ。それに、自分の意思で自由に空を飛べる。だから『天空の人』なのよ」

「私共も、似たようなものです」

女は両手を広げた。

「空を制する者。空そらという種族」

ふわり、と女が浮かび上がる。そして、樹から飛び出した枝の先に乗った。枝の太さは一センチもないかもしれない。その上に、浮いているのではなく立っている

のだ。確実に、自分の両足で。

「貴女様は気付いておいででしょう。私共がこの世界の住人ではない事を」

別の世界の住人である事を。

「貴女様には、」

どすん、と腰に衝撃を感じた。肩越しに衝撃の正体を確かめようとする、そこには白い仮面があった。正確には仮面をした女の仲間なのだろう。身長的に、子供

かもしれない。

「犠牲になって戴きます」

女のをを、雷馬はずっと遠くの音として聞いていた。

第二章 搜索を始める、馴染み始める。

第二章 搜索を始める、馴染み始める。

1

「おかしい」

幻不はソファの上で胡座を掻き、腕組みをして眉を顰めていた。

雷馬が出て行ってもう一時間になる。

「出かけてくるね」

奴が耳元で言っただけで十分後、幻不は眼を覚ましていた。雷馬が単独行動をとるのは珍しい事ではない。一人で買い物に行く事もあるし、外部の人間との交流も無

いわけではない。しかしどうも、嫌なものをを感じる。幻不の予感が百パーセント的中するとは限らない。外れる事もあるし、こんな嫌な予感は外れてくれた方が助か

る。しかし、そう感じているものに限って当たってしまうのが幻不の第六感だ。

何があつた？

雷馬。

何度も呼び掛けているが返答が無い。

雷馬。

こんな事は以前にもあった、雷馬が姫様と呼ばれていた時代に。

あの頃、自分は雷馬より二つ年上で、二万の兵を率いていた。初陣を迎えて暫く経った十四の秋。二戦目で、初黒星を喫した直後だった。戦鬪で負傷した自分

に、当時の長であつた幻不の父は明の姫様の警護の任を与えた。正直憂鬱だった。何せ相手は姫様である。間違つても、自分はそう呼ばれた事は無かつた。

何より、いずれは戦隊を率いる武将となる為に育てられてきた身。幼い頃から呼び名は幻不様。若しくは若だった。短期間だが幼名で呼ばれていた時期もある

。しかし『姫様』は一度も無い。

姫様だなんて、どんな世間知らずなお姫様なのだろうか、と思つて会つてみると、絶句した。

初めて会つた時、その場には雷馬の父である明王と御母堂と、幻不の父である刃王・玄素^{げんしん}がいた。第三者が沢山同席していたため、雷馬は猫を被つ

ていたのだ。

「お初にお目に掛かります。第七十八代明長、杏朱楠安^{きょうしゅなんあん}が娘。杏朱^りつか

莉華と申します」

青い畳に正座して、深々と頭を下げた雷馬こと莉華は、一見、可憐で大人しそうで。それこそ『姫様』に見えた。

「不束な娘ですが、宜しくお願いします」

別に嫁に貰うわけではないのに、御母堂は涙ぐんでいて。正直、困った。

「御心配しなさんな。手負いではありますが、一応は僕の娘です。姫様をお守りする為には命を惜しみませぬ」

何言つてやがる！ この馬鹿親父& a m p ; # 8 2 5 2 ; 幻不は危うく叫ぶところだった。幻不は気付いていたのだ。姫様の顔の下にある本当の顔の存在に。

「アナタって、戦で負けて戦場からサセンされて来たんでしょう？」

両親と親父が居なくなつて、二人で城の空中庭園を歩いていたとき、莉華は笑いながら非常に無邪気に言った。

幻不は本来ならば、「戦場を踏んだ事も無い小娘が何を言うか」と、殴つてやるところだった。しかし、相手は本当に何も知らない姫様である。それに、負けて戦

場から弾き出されたのは事実だ。それ故、幻不はただ、生返事を返すだけにしておいた。

「警護なんて嘘っぱちよ。あたしはこの城から出た事が無いの。だ

から天馬に命を狙われる事も無いわ。本当にあたしの警護をするのなら、城を守っていた方がいい

いのよ」

「では、楠安様と太君（奥様）は何故私に姫の警護を依頼されたのでしょうか」

「簡単よ。あたしの遊び相手」

ずっと城の中に居るのだ。友達も欲しいだろう。そして警護と称して誰かを側に付けるのは、よくありはしないが、珍しい事ではない。しかし、それに武人である幻

不を使うとは中々妙な発想である。苦し紛れの最後の策、とも取れる采配だ。

「アナタも大変ね。あたしの警護に付けられた人は、アナタで十人目になるけど、三日持った人は一人もいないわ」

最長記録で二日と七時間だったのよ。

「記録塗り替えて頂戴ね」

それから、幻不の口から溜息の出ない日は無くなった。毎日毎時間、事ある毎に溜息が出る。ある日は近道だ、と壁を砕き、邪魔だと柱を斬り、庭に水をやると言

って貯水槽の水を抜き、城内にいる兵からカツアゲまでやらかした。

「まったく」

深く溜息を吐き、幻不は明王に戴いた自室の長椅子に転がった。

「お疲れのようね、幻不」

その場には塔画がいた。彼女は明城に楽師の臨時講師として招かれていた。当時の塔画は幻不より一つ年上で、楽師としては勿論、薬師、軍師としても手腕を

発揮していた。

「ああ。大変、お疲れだ」

辞めていった奴等の気持ちが分かるような気がする。あれには一時間だって付き合っではいられない。最長記録保持者は、よく二日と七時間も我慢出来たものだ。

だ。

「でも、貴女だって結構やんちゃしてたじゃない？ 昔」

「アレを『やんちゃ』で片付けるな。それにな、いくら私でもカツアゲまではやってないぞ」

「似たようなものじゃないの」

塔画は床に胡座をかいて、愛用の琵琶を抱えた。

「わたしは、昔の貴女を見ているようで楽しいけど」

「見ているだけの人間はいいな」

当事者は苦しいんだ、と不貞腐れたように言って、幻不は枕を抱えてうつ伏せになった。寝る体勢である。

「一曲弾きましようか？」

「弾いても良いが、私は聴かないぞ。寝るんだから」

「耳は何時でも起きているでしょう？　じゃあ、適当に弾くわね。子守唄代わりにして頂戴な」

「子守唄になればな」

案の定、塔画が弾き始めたのはお世辞にも子守唄とは言い難いモノだった。高音と低音の入り混じるハイテンポの曲で、古典芸能には無用な高速の撥捌きを要

求される曲でもあった。明の楽師の卵達に、毎日こんなモノを教えているのかと思うと、明の音楽界の先が思い遣られる。

幻不は、雅な楽器で演奏するには些か不似合いな曲を枕に眠りに就こうとした。しかし。

& a m p ; # 8 2 5 2 ;

「?！」

「どうしたの？」

突然跳ね起きた幻不に、塔画も思わず撥を止める。

「何か、聴こえなかったか？」

青鋼石の瞳には戸惑いの光が溜まっている。しかし塔画には、幻不がそれ程までに動揺している意味が分からなかった。

「いいえ」

何も聴こえなかったけど？

いいや聴こえた、と額に手をやって、幻不は眉を顰めた。胸騒ぎがする。嫌な予感がする。幻不は一応、声を掛けてみた。

姫。

返答は無い。寝るには少し早い時間だが、休んでいるのならそれでも構わない。

姫。

二度目の呼びかけにも返答は無かった。無視しているのなら、それで良いのだが。

「あるとき、」

幻不は顔の前に垂れて来た髪を掻き上げた。

「私はどう、対処した？」

「絶対記憶の貴女の口からは聞きたくなかった言葉ね。転生し過ぎてボケたのかしら」

帰って来た塔画が、制服のジャケットをソファに投げた。

「忘れたのなら教えてあげるわ。貴女はね、あの後、使用中の能力の波動を追う事が出来る人間を使って、不審な能力使用をしている者を探したのよ。結果、――

で空を飛んで明城を離れて行く者を発見したわ。それが、雷馬
あの時は莉花だったわね、彼女を抱いていたのよ。意識不明のね」

塔画は幻不に、自分が所有している携帯電話を差し出した。

「今、この世界にそれが出来る者はいないわ」

差し出された携帯電話と、

「分かってるでしょう？」

塔画のこの言葉。

それが指している剛神最高の軍師の策を、幻不は気付いてしまった。

「ああ」

幻不は大人しく携帯電話を受け取ると、ある番号を入力した。

「はい、こちら柘榴会本部です」

選挙カーの驚嬢のような、耳に響く女性の声がした。

幻不はここに電話をするのは初めてで、少し緊張していた。

「教主と話がしたいのですが」

「申し訳ありません。只今教主は地方に出ておりまして……」

得体の知れない人間からの電話は直ぐに教主に回さない。良い心掛けである。しかし、話が出来ないのでは意味が無い。その時の為に、幻不は取っておきの

手を持っていた。

「では、『ケイシロウおじさん』に話があるんですが」

驚嬢は暫く止まった。その間、三秒はあっただろうか。

「お待ち下さい」

驚嬢が受話器を置いてすぐ。保留音が流れるよりも前に、

「シア様あ！」

エニが出て来た。

「嗚呼っ。まさか貴女から電話を戴けるとは思っていませんでした！」

幻不から電話を貰ったのが嬉しかったらしい。幻不の隣に立っている塔画の耳にも、はしゃぐ声が届いている。

「おい、落ち着け。エニ」

幻不は眉を顰め、呆れた顔をしていた。正直、この男だけは頼りたくなかったのだが。この際背に腹は換えられない。

「先程はすまんかった。あれから考えたんだが、一日くらいなら、お前の親戚をやっても良いかと思っただ」

「本当ですか?!」

「ただし、条件がある」

「力を貸してほしい」

3

柘榴会本部は高層ビルの立ち並ぶビジネス街の中にあり、六〇階建てで、外から見ると窓ガラスは鏡のようになっていて内部が覗けないようになっていた。正面

玄関には『柘榴会本部』と書かれたガラスの看板が慎ましやかに掲げられていた。玄関ホールは広く大きく、天井にはガラスのドーム

が乗っていて、上質のソファと

テーブルが並び、手入れの行き届いた観葉植物が其処彼処に飾られている。床は磨き抜かれた白大理石で、天井から注ぐ日光が跳ね返されて眩しいくらいに

明るい。何処かの高級ホテルのロビーのようだ。受付に座っている可愛らしいお姉さん達の制服も品が良く、更にそう見える。信者なのだろうか、多すぎない程度

の人が行き交い、広さから生じる寒々しい空気を無くしていた。

行き交う人々やソファに座った人々。その中の数人が場違いに外見年齢の若い二人を見付け、訝しげにこちらを見ている。どうする？ と塔画に眼を向けられ、

幻不は受付嬢に話をしてみるさ、と受付に歩み寄ろうとしたとき、

「シア様あ

& a m p ; # 8 2 5 2 ; ,」

誰のものか一目（聴）瞭然の何とも喧しい声が玄関ホールに響き渡った。

柘榴の神子・シアはエニ一人だけの信仰対象ではなく、柘榴会全ての信仰の対象らしい。その証拠に通行人も受付嬢も、皆一様に眼を輝かせている。

いかん！

それに対し、幻不は青くなる。

目立ち過ぎだ！

しかし焦ったところで、無駄だった。

柘榴会の信者と言えば柘榴の神子・シアの信者である。幻不はてつきり、柘榴の神子・シアを信仰しているのはエニだけで、信者は皆教祖であるエニを信仰して

いるのかと思っていた。幻不が知っている宗教は全て、教祖様々と神よりも教祖を崇めているので、ここも同じだと思っていたのだ。しかし、他所は他所、ウチは

ウチである。ここは、全てが柘榴の神子・シアを信仰しているのだ。

玄関ホールにいる全ての人間の輝く瞳を身に受けて、幻不は冷水が汗腺から噴出すを感じた。その時、幻不の隣に居た塔画が一步退いた。幻不はその動き

には気付いたが、何の為の動作なのか分からず、十一時方向から走って来たエニに抱きつかれて、漸くその意味を悟った。

4

通された部屋は天井が高く、綺麗なガラスが張っており、玄関ホール同様観葉植物が並んでいた。しかし床はフローリングで、玄関ホールで受けた眩しさは感じ

られない。部屋のある階段はこの部屋の上部に続いているら

しい。高価で洒落たマンションの部屋のようにも見えるが、庶民的な紺色のソファと細かい傷が

見えるガラステーブルが、この部屋に親近感を感じさせているのかもしれない。

「ここはワタシの居住スペースなんですよ」

エニのその言葉を裏付けるように、テーブルの下には新聞が一週間前の物から今朝の物までが積んである。それが半ば崩れかかっているため、整理整頓を毎

日几帳面に行っているのではないと見える。散らかりそうだから掃除する。そんな具合だろうか。

エニが給湯室　居住スペースなのだからキッチンと言うべきから丸い木製の盆を持って来た。そしてそれに乗せて来た二つの中身の異なるカップを、

幻不と塔画の前に置いた。幻不の前には珈琲。塔画の前にはジャスミンティー。どちらも素朴な素焼きのカップの中で白い湯気を立てている。

幻不は眼を見開き、塔画はニヤリ、と笑った。

「貴女方の好みは、調査済みなんですよ」

誇らしげに語るエニの言葉が正しければ、珈琲は濃く、ジャスミンティーは無糖の筈。幻不は漬けた糸が真っ黒く染まる程に濃い珈琲を好むし、塔画は紅茶も八

ーブティーもストレートで飲む。そして最近ではジャスミンティーを愛飲している。何処までも調べ上げられるのは良い気がしないが、蜂蜜たっぷりのホットミルク等出

されるよりは良いだろう。

「頂きます」

それに先に手を付けたのは塔画だった。幻不も、薬物を警戒していたのではなく、幻不が手を出すよりも先に、塔画が手を出していただけだ。

「美味しい」

そして塔画はにっこりと微笑む。なんとも愛らしいその笑顔は、幻不には不可能な芸当である。

「早速だが」

幻不は見事に濃い珈琲を一口頂き、カップをテーブルの受け皿に戻すと、向かい合うユニグマを見据えた。

「何がありました？」

エニも馬鹿ではない。幻不がただ考え直しただけで自分の所に電話を超越すわけがない。何か非常事態があったのだ、と彼は感じていた。

気付いていたのなら、話は早い。

「お前が先刻、部屋に來た時に私以外にもう一人いただろう？ 茶髪で、黄色人種ならではの肌の色」

「あの可愛らしいお嬢さんですね？ 覚えていますよ。彼女の身に、何かあったんですか？」

「ああ。拉致されたらしい」

「らしい？」

胸を張って堂々と言い切った割に曖昧な言葉なので、ユニグマは首を傾げた。

「お前達の言葉で言うと、テレパシー、と言うやつかな。それで何度も呼びかけているんだが、返答が無いんだ。寝ていても、レム睡眠なら返答出来るんだが」

「では、ノンレム睡眠状態なんですか？」

「若しくは、空^{からは}瑪を使われているか」

「カラバ？」

「植物なんです」

聞きなれない言葉の登場に、首を傾げたエニに塔画が解説する。

「わたし達の世界に自生している蔓性の植物で、一株に白と紫の二色の花を咲かせるんです。その花にはあらゆる能力を無効化する能

力があります」

「つまり、シア様の送ったテレパシーが届かない、という事ですか？」

「ああ。花が株から切り離されてから枯れるまで、条件にもよるが、平均して五時間。しかし枯れる前に交換すれば、その効果は持続する。空瑪は、強い力を防げ

ば防ぐ程、寿命が減る。しかし、数があれば、」

そんなものは無視出来る。厄介な植物だ、と幻不は苦々しげに眉を顰めた。

「では、そのお嬢さんを連れ去った方々は、シア様の世界からいらした方なのですか？」

「いや。別の世界から来た連中だ。剛神には私達と天馬しかないからな」

「しかし、その植物はシア様の世界にしか無いのでしょうか？ どの世界にもあるのですか？」

「それは分らんが、この世界にもあるだろ？ 邪悪なものを払う植物が。多分、空瑪に似た効果を持つ植物なんだろうな。若しくは、一度剛神に降りて採取して

行ったか。まあ、何れにしても厄介な事に変わりはない」

普段あまり喋らないくせに多くの文字を吐いたので、喉が渴いた

らしい。幻不は珈琲をカップの半分まで喉に流し込んだ。冷めかけた苦い珈琲を飲み下して、幻

不は再びエニと向き合う。

「それで、だ。こちらの声が聞こえないのならば、今の奴は電源の切れた携帯電話だ。しかし圏外には出ていない。奴を捕らえているのは能力者だ。その能力者

の波動を追って、居場所を突き止めて欲しい」

科学の進化した現代、携帯電話やPHSの電波を拾い、居場所を突き止める技術がある。エニが幻不発見に使用したのはその能力者版で、能力者の発する波

動を拾う。しかし、電源の入っていない携帯電話が電波を発しないのと同じく、力を使用しなければ波動も発生しないし、追跡も出来ない。

「空瑪でこちらからの声を遮断していたとしても、相手は雷馬だ。あれを抑えるのに少しでも何らかの能力は使う筈。この世界の人間にそう頻繁に能力者が産まれ

る事もなからう。天馬とは休戦協定を結んでいるから、能力を使っているとしたら、そいつ等しかない」

「休戦って何よ」

聞き捨てならない単語の登場に、塔画は血相を変えて幻不の腕を掴んだ。

「後で説明してやる」

幻不はその手を解いた。

5

「これが、ザビロウです」

幻不と塔画はエニに連れられ、管理室にやって来た。

管理室には巨大なスクリーンがあり、その前には長机が幾つも並んでいる。それに座って何やら作業をしているのは、青い軍服を着た二十代〜三十代前半の男

達だった。

エニに声を掛けられた男がキーボードをパタパタ叩き、巨大スクリーン（メインモニターと言らしい）に出したのは、無数の気泡が上へ上へと昇って行く、青い水

の中の映像だった。

「ザビロウはこのビルを治める人工知能なんですよ。まだ、研究段階ですが」

照明の点け消しから空調、故障箇所の通報など、人工知能といっても、そんな細々とした事がザビロウの仕事なのだという。

そんなもの、人間でも出来るだろうに、と思うのだが。そんな問題ではないらしい。子供の遊び相手は動物でも充分だし、人間の世話は人間が出来る。それでも

、世界の科学者達が力を合わせて『アシモ』を作ったように、人間の力で人間の代わりが出来る知能を作るのが、本題のようだ。更なる進化は、ものぐさでは成され

ない。

「会話は出来るんですか？」

出来たら凄いな、と二人は思った。

「簡単な受け答えなら、出来ますよ。でも感情はありませんし。そうですね、カーナビを想像して頂けると助かります」

目的地を訪ねる。目的地まで言葉で誘導する。目的地近くになって「目的地周辺です」と教える。カーナビゲータが話す言葉はこの程度だ。これを想像して頂け

ると助かります、という事は、ザビロウの言語能力はその程度なのだろう。残念。

エニがザビロウに声を掛けた。画面の中で一際大きな気泡が上がった直後、

「何か、ご用、ですか？」

途切れ途切れだが、女の声が返って来た。女の声といっても。成

分の八割方電子音で、一昔前の留守番電話のメッセージの声に似ている。

「『パワートレースシステム』起動」

「了解、しました」

突然、ポン、とモニターに日本地図が現れ、ある県がズームアップされる。県の東端に軽快な電子音を立てながら、赤い光が灯った。

「ズームアップ、します」

光を中心にズームアップされ、モニターが一つの町の詳細な地図になる。その光の位置を確認し、幻不は二、と笑った。

「助かったぞ、エニ。ザビロウ、職員の皆さん、御協力感謝します」

と踵を鳴らして幻不はドアに向かって跳んだ。塔画もそれに倣い、驚異的な跳躍力で瞬時に二人はドアの前に並んだ。

「シア様！」

「無事に雷馬を連れて戻したら、浦安の鼠王国でも大阪の映画村にでも何処へでも付き合ってやる。戻るまで待っていてくれ」

顔色を変えたエニに手を振って、幻不と塔画はビルの中から姿を消した。

水が落ちる音がする。その音が反響して微かに帰って来るあたり、この部屋は結構な広さがあるのだろつ。

雷馬は瞼を上げた。

まず飛び込んで来たのは白い天井だった。照明が何処にあるのか分からないが、周囲の色彩を識別出来る程の明るさがある。頭を巡らせると、二メートルと少し

と考えられる然程高くはない天井が何処までも続き、壁が見えない。自分が寝かされている台（若しくは床）も白だった。

そこで、雷馬は信じ難いものを見た。

「何これ！」

台（若しくは床）に広がった自分の髪が、栗色ではなく黄金に輝いていたのである。日本人で髪の色が薄い人間は沢山いる。染めて金髪になった人間もいる。

白人種となれば、金髪など珍しくもない。しかし、この折り紙の金色によく似た色の髪の持ち主は、自分以外には居ない筈だ。つまりこれは自分の髪。

他の二人は産まれた時から黒髪に茶の瞳など此方の世界の色彩を保持っていて、力を使う場合のみ、天空人の頃の色彩が戻る。だが雷馬の場合は逆で、肉体

が魂の影響を受けているらしく、髪や瞳の色は天空人の頃と同じに

なっている。黄金の頭髮と、紅玉の瞳。いつもは目立たないように栗色と茶色に色を変えている

のだが、気を失った為にその術が切れたのだろう。頭を無理矢理上げて、胸を見てみる。そこに、嫌なものがあった。

白と紫の花を着けた蔓が、身体に巻き付いている。

空瑪だ。

空瑪はあらゆる特殊能力から身を守る為に防壁を張る。その防壁は目で見える事は出来ないが、衝突すれば弾き返されてしまう。空瑪を身体に巻きつけられた状

態で力を使えば、防壁で押し潰されてしまうのは必至だ。よって、髪の色を戻す事は出来ない。

さて、これからどうしようか。雷馬は頭を右に向けた。そこに居たのは、

「?!」

「お目覚めですね」

雷馬を呼び出したあの女だった。

寝かされている雷馬の顔が女の腹の位置にある為、寝かされているのは床ではなく台なのだろう。寝台か、診察台か。若しくは調理台か。

「申し遅れました。私、空の民が長・柚亞仁様の側仕えを勤めております琉葦芙と申します」

琉葦芙は深々と頭を下げる。雷馬に敬意を払い、失礼の無いようにしているのかもしれないが、捕らえた事そのものが失礼だ。

空瑪が無ければ八つ裂きにしてやるのに！ と雷馬は無表情の下で憤慨していた。

「犠牲になつてもらつ、つて言っていたけど。何をするつもりなの？」

何が何でも答えて貰うわよ、と雷馬は琉葦芙を睨みつける。

それをどう感じたのか分からないが、琉葦芙は答えてくれた。

「我々の長、李亨洲様をこちらの世界に呼び戻すのです。その儀式の、」

「生贄になれって事？」

「はい」

それは参った。三度目の人生、まだ始まったばかりだというのに。他種族の為に命を落とすなんて嫌だ。絶対に御免だ。

「貴女　　琉葦芙もその儀式でこの世界に来たの？」

そうなれば、最初にこの世界に来た空の民はどうやってこの世界に降りたのだろう。

「いいえ。私は空間を渡って来ました。貴女の部下の方々と同じ方法かもしれませんが。しかし、李亨洲様は一度、我々の祖国で亡くなっているのです」

「一度死んだ者を、別の世界に連れてこようというのね？ 転生させたらどう？ あたし達は不可抗力というか、自然現象だけど。剛神にはそんな技術があるのよ。」

魂を凍結させておく必要があるけど、凍結しておかなくても出来ないのではないのよ？」

転生卵てんせいらんという特殊な卵を使った方法で、人体の素もとが入った転生卵にその魂を降ろすのだ。静かな場所で十月十日、摂氏三五・六度で暖め

ていれば転生して産まれて来る。詳しい原理はよく分からないが、この方法を使つて幻不の最初の腹心達は転生し、鋼雅と共に戦場を駆けた。

「しかし、凍結無しにそれが出来るのは亡くなってから一ヶ月の間。李亨洲様は、亡くなってからもう二十年も経っているのです」

「じゃあ無理よ。若しかしたらもう、何処か別の世界で何かに転生しているかもしれないじゃない？」

転生卵を使うにしても、魂を連れて来るにしても、もう転生しているのであれば魂は動かせない。転生していないのであれば、話しは別だが。

魂の道に国境は無い。勿論、世界と世界の壁も、彼等には無だ。彼等は何処へでも行き、何処かで転生する。普通は、記憶を全て消去された真っ白な状態で。

「それを、無理矢理引つ張って来るつもり？」

あまり答えを聞きたくは無かったのだが、質問した直後、間髪空けずに琉葦芙は頷いてしまった。雷馬は、なんて非常識な！と脱力する。

「普通考えないわよ、そんな事。その、李亨洲様？ その人だって、今は何もかも忘れて幸せに生活しているかもしれないのよ？ それを無理矢理、魂を引つ張り

出す、なんて。可哀相だわ！」

「可哀相……？」

「ええ！」

思った事を全て叩きつけて、雷馬はちょっとスッキリしてしまった。その反面、琉葦芙は表情を曇らせる。自分達の考えの誤りに気付いてくれたのなら、それで良

いのだが。

しかし、

「李亨洲様は私達民を愛しておられましたから、私達の元に戻るところを望んでいらっしゃる筈です」

ここまでではつきり言えるのは、一種の才能かもしれない。

「アンタねえ！ 相手は記憶が無いのよ?!」

「貴女にはあるじゃないですか。前世の記憶」

「好きで記憶持っているんじゃないの！ 絶対有り得ないのよこんな事！ 想定外！ 不可抗力！ 超常現象！」

どんなに喚き散らしても、望むべき姿が目の前にあるだけに、琉葦芙も譲らない。

「貴女に出来て李亨洲様に出来ない事はありません」

え？ そう来る？ 大人に見えていた琉葦芙が、突然聞き分けの無い子供に姿をかえた。

「いや、だから、出来るも何も。やりたくて、こうなったんじゃないの。知らない間にこうなっちゃったのよ！」

「いいえ。何か策がある筈です。貴女が記憶を持っているのだから、李亨洲様だって」

「だーからあー！」

あたしは何も知らないし、やってない！ しかし、そこまで言つて雷馬は諦めた。これ以上、どんなに叫んでも到底理解して貰えないだろう。

「それで？ 儀式つて、どんな事するの？」

やはり、祭壇に向かって巫女が祈ったり舞ったり、祝詞を唱えたりするのだろうか。

「床に魂を呼び出すモンを描きその中心に横になって頂きます」

「モン？」

「門である紋です」

掛詞らしい。

「魔方陣みたいなものかしら」

「そうですね。そして、柚亞仁様が祝詞を唱えて李亨洲様を呼びます」

「はいはい」

「そして、モンからお出でになった李亨洲様の最初の食事になって頂きます」

7

石榴会本部から姿を消した幻不と塔画は、雑居ビルに居た。俗に言う瞬間移動である。ただし、この部屋に帰って来る片道だけに限られるのだが。

「あの光があつたのは、パレスニュータウンね。イオンの近くよ」

塔画がテーブルに市内の地図を広げ、光のあつた場所に指を立てた。

パレスニュータウンは商港付近に造られている住宅地である。現在は住宅が八割方完成し、住民の為の二四時間営業のスーパーマーケットも出来た。スーパー

マーケットは二週間前にオープンして営業をしているが、パレスニュータウン自体は未完成の為に入り口が封鎖されている。

「身を隠すには絶好のポイントだな」

幻不は小銭を幾つか握ると、ジャケットを脱ぎ捨て、ベストの上に裾の長い上着を羽織った。

昨夜着ていたものと同じもので、ナイロンか木綿の薄くて柔らかい生地で出来ている。前を止める釦は小さく、鳩尾までしか無い。異様に裾が長いワイシャツと言

った具合だ。

「行こう。中央駅から、バスが出ている筈だ」

「そうね、と言いたところだけど、良いかしら？ 休戦って、どういう事？」

幻不は後頭部を掻いた。百文字以内で簡潔に説明して相手を納得させられる自信が無い。

「仕方無い。すぐに行きたかったんだが、速く行けば寄り道くらい平気か。敵の情報も貰わないといかんし」

「何、考えているの？」

幻不は部屋を出ると、荷物も何も無い、ガランとした階段を上り始めた。

「それならコイツは無用だな。戻しといてくれ」

後ろを見ずに小銭を放る。五百円玉一枚と十円玉が一枚ずつ。駅からパレスニュータウンの最寄りのバス停までの二人分の運賃だ。

「幻不！」

自分の手の中に落ちて来た小銭を部屋に放り、塔画も立ち入り禁止のロープを跨いだ。

組んで長い相方である。相手は何を考えているのか、大体見当が付く。しかし、それは余りにも無謀だ。剛神ならまだしも、この世界では騒ぎになる。階段を駆け

上がると、腰に巻き付けたウエストポーチに収めた道具が、微かに音を立てた。

「幻不！」

今の貴女は鋼雅とは違う。身体が小さ過ぎるし、筋肉が少なすぎる。加速に耐えられる筈が無い！

塔画が屋上に幻不の背中を見付けた時、騎馬と武器が乱れ合う戦場にも映えて響き渡る高音の指笛が耳を刺した。

その直後、然程広くはない屋上に風が集い、渦を巻き、その中心に黒い影が現れた。それは大きく、この世界の競走馬より巨大だった。引き締まった身体は黒

い鉄の鱗で覆われ、額には水晶の角が輝いている。

不老不死の愛騎、麒麟・てんえい槇永だった。

背に着けている鞍は幻不が鋼雅であつた頃に使用していた物と同じ物で、二百年の時を、主を待ち続けていた鞍は古びて施されていた装飾は見る影も無い。

幻不は、ひょい、と槇永の背に乗った。

「乗れ、塔画」

手を差し出して、麒麟の背に誘う。

この世界で槇永を走らせれば騒ぎになる。わたしは麒麟に乗れる器ではない。今この場で何を言おうとも、幻不は手を引かないだろう。言つた事は必ずやりとげ

る女なのである。

塔画は腹を決め、幻不の手を取って槇永の背に跳び乗った。

「& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; まつてろ」

幻不は手綱を掴んだ。槇永は馬のように操らなくても幻不の良いように動くので、この手綱は万が一の落馬防止用のシートベルトのような物だ。

槇永は蹄に風雲を起こし、宙を蹴る。

昼食時で賑わう繁華街を、一陣の風が吹きぬけた。

8

それはビデオの早送りよりも速く、一瞬で周りの景色が変わった。左右を走り去る街並みを眺める事も出来ず、あまりの速さに塔画は呆然としていた。

「身体が壊れる程の加速はしないさ」

私の身体がどのくらいの速度まで耐えられるのかは、槇永が知っているからな。幻不はそう言って、後ろに乗った塔画に目を向けた。

「何だ。あの程度で目を回したのか？」

あの程度?! 塔画は叫びそうになったが、声が出る前に目に映ったものに息を飲んだ。

幻不が槇永を走らせて来た場所は、

「浅木町？」

異様な程に静まり返った浅木町の商店街だった。

現在の時刻は午後十二時四〇分。賑わっていないなくても、人の姿があっとおかしくはない時間だ。しかし、どの店もシャッターすら上がっていない。人は勿論、野

良猫も、虫の姿さえも無い。

「見事なゴーストタウンだな。夜に来た時は感じなかったが」

なあ？ と幻不は塔画にでも槇永にでもない、第三者に声をかけた。

「スマリ」

敵軍大将・スマリは塔画の目の前に立っていた。突然の敵の登場に、塔画は思わず身構える。

「必要無い」

幻不は槇永の背から降りると、武器を取る事もなく、胸の前で腕を組んだ。塔画も幻不に倣い、槇永を降ろす。

「言つたろ？ 休戦協定を結んでいるって。天馬一人が結んだ契約は天馬全体が結んだ契約でもある」

「今は、貴女方との戦いを守る為に邪魔者を排除するのが第一ですから」

そう静かに語るスマリの声は、今の身体の声なのだろう。女性的で柔らかな響きがあった。それは塔画としては、あまりにも新鮮な

ものだった。以前の、塔画の知

っているスマリは低くしわがれた声をしていて、その声で紡がれる言葉はたどたどしく、単語一つ二つを並べただけのものだった。しかし現在は、かなりの饒舌である。

「雷馬が拉致された」

「邪魔者の、犯行ですか？」

「私はそうだと断定しているが」

お前はどっと思っ？

「私達に何をせよと？」

幻不が言わんとしている事は、宿敵も気付いたらしい。

「情報を貰えないか？ 私達は相手がどんな奴なのか全く分かっていないんだ」

「でしょうね」

「こっちの情報収集能力がそっちより劣っているのは充分承知している。だから、簡単な事で構わない。教えて貰えないか？」

「そう言われなくても、私達もあまり分かっていないんですよ」

塔画の目の前で交わされる会話。それは、何だかテレビかスピーカーの向こうの物のように思えた。それ程、幻不とスマリが向かい合って会話している姿は異様

だったのである。

ましてや、休戦とは。幻不は一切休戦に関する説明をしていないが、塔画自身、理解は出来た。スマリの、『貴女方との戦いを守る為に邪魔者を排除するのが第

一ですから』との発言から。天馬も、雷馬を拉致した者を倒す為に動いているのだ。納得はしたが、矢張り心中は複雑だった。この戦いは今まで、少なくとも塔画が

愈牙として人生を全うするまでは一度たりとも止まった事は無かった。剛神の何処かでは必ず一戦交えていた。

それを、あっさりと「休戦協定を結んだ」とは。

「毒の砂漠の世界に、空うつほという種族がいるんです」

「うつほ？」

「体重を自在に操り、空を飛び、標的を潰す。私達が最初に彼等を発見したのは、二ヶ月前です」

「随分最近なんだな」

「ええ。しかし、数はあまり確認されていません。十人弱ですね」

「どの辺で、目撃されているんだ？」

「商港付近」

スマリのその答えに幻不は満足げに唇の両端を吊り上げる。

「有り難う。助かった。他の連中にも言っておいてくれ」

幻不は再び槇永の背に乘る。塔画もそれに続いた。

「必要無いとは思いますが、」

スマリは幻不を見上げて、穏やかに微笑んだ。

「この程度で死なないで下さいね」

「お前もな」

そして強い風が吹いた瞬間、幻不と塔画は浅木町から消えた。

9

「貴女とスマリって、どんな関係なの？」

「どんな、と言われてもな。敵同士としか言えんぞ」

港のあらゆる場所に放置されているコンテナの陰に身を潜め、二人は周囲を伺った。槇永は「ご用があれば、お呼び下さい」と伝えて、姿を消している。

「昼飯時だからな、人がいないのは当然なんだが。どうする？」

パレスニュータウンにいるのは分かった。しかしパレスニュータウンも結構な広さである。どこかの家に入っているのだろうとは考えたが、住人を待つだけの家は幾

つもある。それを一つ一つ調べていては、日が暮れてしまう。

「人に聞く、のも、良い策ではないわね」

二ヶ月くらい前に異世界からやって来た空ソラという種族が潜伏している場所を知りませんか？　なんて尋ねたら即刻、異常者扱いで通報される。

「参ったな。奴等が動くまで待っているのも、何か嫌だし」

「奴等？」

「スマリさ。奴等が雷馬を見殺しにする筈が無いからな」

幻不は俯いて後頭部を掻いた。そして三秒程頭を抱えて唸ると、突然止まった。

「どうしたの？」

幻不は突然頭を上げた。その動作には流石の塔画も驚いたが、次の発言にも目を剥いた。

「お前、今どのくらい力使える？」

「え？」

「だから、愈牙の頃と比べて、どの程度力が使えるかって聞いているんだ」

愈牙の頃。つまり前世はその前に比べると三人共力が強い時期だった。一撃で大山を砕き、大軍を潰し、念じるだけで大地を動かした。しかし現在、幻不はそ

の五割の力も無い。

「二割か、三割……。そのくらいは戻って来ていると思うわ」

「その中で、探索術はあるか？」

「あるけど、大規模は無理よ」

「パレスニュータウンを探せば充分だ」

塔画及び優族の力は、植物と大気が関わっているものが多い。現在塔画が所持している探索術も、大気と同調して標的を探すものだ。生物は空気が無ければ

生きられないし、真空空間にいてもなければ空気から逃れる事は不可能だ。従って、大気と同調した塔画の眼から逃れる事は出来ない。出来たとしても、そ

れは空気の無い場所しかないのだ。

塔画は左手を翳した。目を瞑り、邪念を払い、集中する。突然、左手の小指が崩壊した。水分が蒸発した泥団子のように、ぼろぼろ

と崩れて行く。次に、薬指。中

指、人差し指、親指。左手が全て無くなると、腕が肱、肩へと崩れる。地面に着いた両足も、爪先から無くなって行く。痛みは無い。ただ　こう言うのもおかしい

かもしれないが、無となる感覚だけがある。膝から先、足のある感覚が無くなるのだ。指を動かそうにも、指は無い。手を握ろうとしても、手が無い。そうしている間に

も。膝と両腕が無くなった。消滅は腰を越え、胸を消し、塔画の頭を崩壊させた。塔画の身体は、大気中に霧散する。塔画であった粒子はパレスニュータウンを覆

い漂いながらただ一点を求める。

そして、粒子がある家屋に集まった。

霧散したのは塔画の意識であって、塔画の身体本体は幻不の目の前にあった。瞼を下ろして、左手を翳したままの体勢で。

この作業を見るのは初めてでは無い。鋼雅であった頃も、その前も何度も眼にしている。

幻不は感覚が無くなる感覚に興味があった。何分、本職は戦争屋である　戦士、と言った方が聞こえは良いかもしれない。怪我をするのは得意技だし、腕は

流石に失った事はないが、指を失ったのは何度かある。しかし、それには何時も激痛が伴った。塔画が感じている感覚が無くなる感覚

とは異なるだろう。明らかに

。若し同じものならば、痛みや怪我を極力避けようとする塔画が進んで行う筈がない。

暫くかかるな。

左手を翳して三十秒。普通に考えれば長くはない時間だが、優族の探索術にしては時間がかかっている。詳しく調べる為に、深くまで入り込んでいるのかもしれない。

ない。ただ黙って、塔画の意識が戻って来るのを待っていても暇なので、幻不は堤防の端に立って上着のポケットからアルミのボビンを取り出し、それに巻かれた

木綿の糸を三メートル程、解いた。それを、深緑色に澱んだ海に垂らす。

刃の族の探索術である。

優族が樹木と風を得意としているのに対し、刃は水と金属を操るの術を得意としている。

吸水性に富んだ木綿の糸は、海水を吸い、幻不の力の調整で指先まで、水を届けた。そしてこの糸は、幻不の感覚器官の一つに変わる。糸を垂らして海水を

通じて探っていると、あるものにぶつかった。

「あつた！」

それと同時に塔画が声を上げた。

「北端の、東から三番目の家よ！」

「御苦労。私も見付けたぞ。生物である限り、何者も大気と水からは逃れられないからな」

幻不は糸を引き上げ、海水を払う。

「行こう。北端の、東から三番目」

10

細長い布が腕に巻かれて行く。

色は白で、包帯によく似た姿をしているのだが、素材が違う。馴染みのある柔らかく、滑らかとは言い難い肌触りは無く、実に滑らかで艶やかである。しかし通気

性は悪いらしい。巻かれたそばから布と肌の間に熱が籠る。

「これは、何なの？」

起き上がらせた雷馬の身体に、一々空瑠を解いては巻き、解いては巻き。そんな事を繰り返しながら琉葦菜は布を巻いて行く。

一度全て空瑠を解いてしまえば作業も楽になるのだろうが、それをしていないのは、矢張り外部からの干渉や雷馬の逃亡を恐れての事だろう。

「私達、空の正装です」

「正装？」

この布ぐるぐる巻きが？　これではまるでミイラではないか。

「この上に装布そうふを着て頂きます」

「そーふ？」

「装飾を施した布の事です」

それでは、これはアンダーシャツと言ったところだろう。

「どうして、こんなにぐるぐる巻きにするの？」

雷馬は拉致された事も、生贄になる事も許してはいなかった。しかし、怒っても始まらない。しかもこちらは囚われの身だ。無駄に動いて、助かる可能性を無にする

るのも馬鹿らしい。それに、目の前にいるのは滅多に出会えない異世界の生物だ。これを期に、異世界の文化を学ぶのも良いかもしれない。幸い、琉葦笑は尋ね

た事は全て答えてくれる。若しかしたら、会話するのが好きなのかもしれない。

「私達の世界は、大部分が砂地なんです。その砂は有害な物質を含んでいて、肌に触れるとかぶれるのです。地形上、風が強いもので

すから、砂が服の中に入

っても肌を傷めないようにする為です」

「普段でも、ぐるぐる巻きにするの？ 大変じゃない？」

「最近では、布を巻くのは正装する時だけです。普段は、袖の長い服の袖口と襟に布を巻く程度です」

毎日出かける度にこんな事をしていたは、さぞ忙しかろうな、と思ったのだが、大切な時にしか着ないとすれば、何と無く分かる。現在の日本でも、大部分の人は

普段は着脱の楽な衣服を着る。日本独特の和服は一部例外も居るが、正月や七五三等の特別な時にしか着ない。この布ぐるぐる巻きも、こちらの世界の和服と

同じ立場なのだろう。

「この色は、私達にとってはとても大切な色なんです」

まだ尋ねていないのだが、琉葦^{うつほ}菜は空の色の文化を語り出した。

「この世界で一番軽い物は何だと思いますか？」

「空気……。水素？ ヘリウムかな？」

「私達は、雲だと思っているんです」

世界で一番軽い物は雲。とは、中々面白い考えである。

空に浮かび、けして落ちる事のない雲。風と共に流れて行く雲。

「私達がどんなに体重を軽くしようとも、雲より軽くはなれない。だから私達は、最も軽い雲を、神聖化するんです」

「だから、雲と同じ色の白を大切にするの？」

「ええ。これから着て頂く装布もこの色ですよ」

目の前に居るのが琉葦芙一人とはいえここは敵陣営の真ん中である。随分呑気な捕虜だ。

布を巻き終わり、平たい桐の箱から装布らしき白い布を取り出して、琉葦芙は考え込んでいるのか、黙り込んだ。

「どうしたの？」

雷馬の問いかけにも、「いえ」と生返事を返すだけ。琉葦芙はそれから三〇秒。黙って考え込み、そして漸く顔を上げた。

「後程、私達の長に会って頂けませんか？」

「貴女達の長に？ あたしが？」

「はい。強制はしません。本当に、貴女様が宜しければ」

「いいよ！ 会ってみたい！」

雷馬の反応に、琉葦芙は心底安心した様だった。

それから琉葦芙の手により装布を羽織り、琉葦芙に先導されながら、空の長の居る部屋へ向かった。髪に空瑪を巻きつけられたままだが、気にはならない。

敵の長に会う事も、陣営の奥地に踏み込む事も、恐怖は無かった。むしろ、好奇心がそれを上回っている。相手は、自分と同じ一族の長である。見上げず蔑ま

ず、同じ目線で同じ立場で接すれば、問題は無いだろう。

ただし、空にこちらの常識が通じれば、の話だが。

雷馬は少し、振り返ってみた。

窓の無い、床も壁も天井も、白く塗られた廊下が何処までも続いている。廊下の終着点が見えない。

今立っている場所から正確ではないだろうが、十メートル程後ろに自分が置かれていた部屋の扉がある。十メートル以上の廊下を持っているあたり、この建物は

相当広いようだ。

病院、又は学校か。何れにしても一般的な家屋とは異なるものと推測される。

何処なのかしら。此処。

あれから何時間、何日経ったのだろう。出かけてくる、とは言っ

ておいたものの、そろそろあの二人も心配しているのではないだろうか。

いや、是非とも心配していて欲しい。

このまま大人しくしていても李亨洲様とやらの食事になってしまふ。転生して未だ十数年。こんなところで生涯を閉じるのは極力避けたい。それが天命であっても

、女皇のシナリオであつたとしても、悪足掻きと往生際の悪さは全く変質していないのだから、どこまでも抗ってみせる。

その覚悟はあるのだが、戦闘も策も、雷馬はどちらも不得意だった。戦闘は出来なくもないのだが、護身術程度だし、策など講じる前に頭が爆発してしまう。しか

し、ここはなんとしてでも抜け出さなくてはならない。何もせずに殺されるのは御免だ。

琉葦芙が白い扉の前で立ち止まった。

琉葦芙は身を少し屈めて扉に口を近づけ、

「ゆあ 柚亞仁様」

長の名前を口にした。

「琉葦芙で御座います」

扉の向こうからの返答は無い。しかし琉葦芙は扉を開けた。

「！」

部屋の中は真っ白で、異様な眩しさに雷馬は眼を覆った。廊下の照明が抑えられていたのか、それともこの部屋の照明が強いのか。眼の奥に激痛を覚える程だ

った。

「大丈夫ですか？」

琉葦芙の声がする。雷馬は瞼の上から眼球を軽く押さえ、痛みが引いたのをみて目元を手で覆い、

「何とか」

ゆっくり眼を開け、何度も瞬きをする。

光を遮断していた手を外し、少しは慣れたが、未だに強烈な光に眼を顰めながら、雷馬は琉葦芙を探した。

「！」

光の中に漸く琉葦芙を見つけた時、雷馬は思わず眼を開いてしまった。

そこにあつたのは、高さ一メートル弱の長方形の立方体で、その上に少女が縛り着けられていた。頭以外を、白い一枚の布が立方体ごと覆っている。少女の目

元は細い布で覆われており、布で隠されていない部分は鼻と口元だ

けだった。

何とも、異様な姿である。

「私達の長、柚亞仁様です」

立方体の隣に立った琉葦芙は誇らしげな顔をしているが、

「ゆあに……？」

雷馬は眉を顰めた。

しかし逃げ腰では相手に失礼だ。雷馬は姿勢を正す。正直、騙されていると思った。琉葦芙に、これが長だ、ただの人形を紹介されているのかとも思った。しか

し、彼女の真剣な表情からは、そんな事は考えられない。

「初めまして、柚亞仁さん」

「だ、あれ？」

その声は低くしわがれていて、口調は幼い女の子のものに似ていたが、音自体は聞いていて心地よいものではなかった。

「貴女の部下に連れて来られた天空人、明の長・杏朱雷馬」

「てん、くうじん？」

「イニシマって人を呼び出す儀式の生贄になるんですって？ あた

し」

「いに、し、ま？」

柚亞仁の口からその名前が出た直後。

「ぶっ。」

深紅の液体が、口から溢れ出した。

「がぶっ」

「柚亞仁様！」

胸を上下させ、咳き込む柚亞仁の胸に、琉葦芙は手を添えた。

「どうしたの?!」

「発作です！ 最近は落ちていていたのに……。柚亞仁様。柚亞仁様？」

琉葦芙は液体を吐き続ける柚亞仁の耳元で、柚亞仁の名前を呼び続けた。

「る……いふ？」

呼び続けて数分。漸く、柚亞仁の口から言葉が出た。

「はい。ここに居ります」

「いに、しま、は？」

李亨洲。

「いにしまは、どこ？」

李亨洲を探しているのか、柚亞仁は少しか自由の効く首を精一杯動かす。

「いにしまあ！」

その絶叫と同時に、液体が口から飛び出す。その液体に伴って、何かが飛び出した。それは細かい物で、色も液体に似ている為か見逃してしまいそうなものだ

つたが、雷馬の目には確かに見えた。

肉片？！

もしかしたら、内臓の一部かもしれない。

「柚亞仁様、落ち着いて下さい。柚亞仁様！ 亞瀧亞劉！ 出て来なさい！」

琉葦芙の声で先程自分が入ってきたドアが開き、琉葦芙の服と同じデザインの青い服を着た金髪の女が入ってきた。

「瀬霧珠を！ 早く！」

金髪の女・亞瀧亞劉は七つ連なった緑色の珠を差し出した。琉葦

芙はそれを受け取ると、柚亞仁の鳩尾にそれを押し付ける。

「げう！」

それに、柚亞仁が呻く。一見、内臓を圧迫されて苦しんでいるように見えるのだが。

亞灑亞劉もそれに加わり、雷馬の位置からは柚亞仁の姿が見え難くなった。

「ぎゃああー！」

しかし時折聞こえてくる声で察すると、容態はまだ安定していないと考えられる。

琉葦芙と亞灑亞劉が緑の珠を柚亞仁の鳩尾に押し付け始めて、三分弱。やっと、柚亞仁な呼吸をするだけになった。

「御見苦しいところを」

申し訳ありません、と琉葦芙は額の汗を拭きながら詫びた。

「病気なの？ この人」

病気にしても、ここまで暴れるのは尋常ではない。

「病気と言えば、病気なんでしょうね」

琉葦芙と亞灑亞劉。二人揃って俯いた。

「願掛けを、御存知ですか？」

琉葦芙の話によると、柚亞仁は願掛けをしているのだという。願掛けというと、『息子がサッカーの大会に優勝するまで禁酒する！』とか、『友人の病気が治るまで

煙草は吸わない！』等が一般的であるが、柚亞仁の場合は、

「李亨洲様がお戻りになるまで、自分も同じ痛みを味わい続ける、というものなんです」

「痛み？」

二人は元の部屋に戻り、雷馬は台に腰掛け、琉葦芙は立ったままで話をしていた。

「私達の考えでは、魂は肉体の中にあつてこそ安息を得るものなのです。その為、現在の李亨洲様。つまり、肉体の外にいる状態は、苦痛でしかない」

「その苦痛を柚亞仁さんは共有しようとしているのね」

「双子の、ご兄妹ですから。同じように育てられただけに、片方が苦しんでいるのは辛いですよ」

そこまで聞くと、何だか可哀想に思えて来た。しかし、そんな同情一つで命を差し出す気にはなれない。

ああ。どうしよう！

このままでは極自然な流れで生贄にされてしまう。琉葦芙には信

用され始めているようだし、この信用を裏切って、無駄な戦争が始まるのも避けたい。

幻不ちゃんなら、塔画ちゃんならどうするんだろう。

そう考えて、すぐに止めた。

そもそも、幻不なら公園で琉葦芙を始末しているだろうし、塔画なら始めから声に応じなかった筈である。

相変わらず、

考え無しだなあ。あたし。

悔やんでも悔やみきれない自分の無能さを、雷馬はどこまでも悔やんだ。

第三章 激闘！ パレスニュータウン空（うつほ）基地

第三章 激闘！ パレスニュータウン空基地！

1

パレスニュータウンは一二〇棟の家屋が並んでいる。小さな子供を遊ばせるには適当な広さの庭を持つ、最近流行りの可愛らしいデザインの家屋だが、流石に

碁盤の目状に百何十棟も並べると不気味でしかない。

幻不と塔画は能力の気配を完全に消し、問題の家屋の近くまで迫っていた。殆ど足音を立てずに。

「あそこか？」

植え込みに身を潜め、問題の北端の東から三番目の家屋を窺う。見張りの姿は見えない。

「ええ。でも気を付けて。どんな仕掛けがあるか分からないんだから」

「誰に言っているんだ？」

幻不は上着の上から腰に携えた獲物に触れた。

頼むぞ、相棒。

「それで？ どうする？」

どう踏み込む？

「若気の至り、でもやってみる？」

若気の至り。その言葉に、幻不は苦笑を浮かべた。

「策士らしからぬ発言だな」

「でも今回は、それが一番だと思うのよ」

「何があるか分らんと、言っただけだろうが」

「それはそうだけど、相手について調べている時間があつて？ 天馬の情報収集能力でもあの程度だったのよ？」

「それも、そうだな」

幻不はこの戦いの分の悪さを感じながら、サバイバルナイフを抜いた。

「では、出撃命令を。牙翊^{ひやく}幻不將軍」

塔画もまた、獲物を手に取る。

「部下が一人きり。それも軍師殿とはな」

「初陣にしては上等じゃない？」

「ああ。確かに」

幻不は軽く左右のアキレス腱を伸ばした。そしてそのままクラウチングスタートの構えを取る。塔画も、右足を下げて体勢を低く構えた。

「出陣！」

二人が同時に地面を蹴る。施錠されている筈のドアを蝶番ごと破壊し、罨も何も考えずに敵陣に強行突入！これが通称・若気の至りである。

2

筋肉と筋肉がぶつかり合う音。そして液体と共に床に崩れる音。骨を殴る音。その音の中心に、幻不が居た。左手に抜いた筈の獲物が無いのは、相手が獲物を

使う程では無かったから。

突入から一秒。玄関部分で、二人は障害と向かい合った。

最初の障害は五人。中肉中背の若い男達だった。中肉中背といっても、二人より大柄なのは当然で。しかし体格の差は技術で補えば良いだけの話。最初の五

人を十秒足らずで始末した二人は、幻不がリビングダイニング、塔画が座敷に分かれて、そこに潜んでいた（事実を白状すると、寛いでいた）障害を倒して行く。

リビングに居たのは十五人。居過ぎではないだろうか、と思った。しかし探す手間が省けたと思い、そこはそれで良しとする。十五人の障害は、突然の侵入者に

声も出ないようだった。しかし即座に自分達がやるべき事を思いついたらしく、一斉に飛び掛って来た。

室内のような狭い場所では、数よりも敏捷性と持久力に優れた者が優位となる。戦い馴れ・喧嘩馴れした幻不がそれにならないわけが無い。

障害達の攻撃をかわしながら、足元を狙って衝撃を繰り返す。

そして十人を片付けた頃、

「最低一人は生かせておいてね！ 幻不！」

座敷の障害を沈めて、塔画がリビングに駆け付けた。

「誰一人殺しちゃいない！ お前の方こそどうなんだ？ 殺していないだろうな？！」

「誰に言ってるのよ。貴女とは違うの。無駄な殺生はしないわ」

そう言いながら塔画が繰り出す衝撃に、障害達は次々と血を吐いて倒れて行く。多分何人かは、御逝去されたのではないだろうか。

「なら、良いんだが」

そこにはあえて触れずに、幻不は障害の排除を続ける。

「畜生！」

幻不に巴投げを食らい、昏倒していた障害の一人が何とか立ち上がり、起き上がれずに居る周囲の仲間に檄を飛ばした。

「お前等！ それでも空の民か！ 何としてでもこいつ等が地下基地に行くのを食い止める！」

「ほう」

幻不がその障害の頭を蹴り飛ばす。

「そうか、地下基地か。そいつぁ面白い」

再び床に沈んだ障害の頸動脈を右手で圧迫し、幻不は目を無理矢理合わせた。

「案内して貰おうか。その地下基地の入り口は何処にある？ この家の中にあるんだろ？」

「幻不」

塔画が何処から持って来たのかタオルを一本、投げて寄越した。これをどう使うのか、幻不は重々承知していた。

「どちらが悪者が分からんな。これでは」

「勝てば官軍って言うでしょ？ 勝った方が正義よ。勝つまでの過

程は、どちらが正義でも悪でも構わないの」

世界中の正義の味方が聞いたら青くなって大泣きしそうな大層な理屈ではあるが、まあ、確かにそうである。いかなる正義も、反対の立場から見れば悪なのだ。

正義など、対抗者を斬る為の屁理屈に過ぎない。

「すまん。こちらの正義を貫く為に、犠牲になってもらうぞ」

幻不は障害の口を抉じ開けると、そこにタオルを詰めた。別に声は幾ら出されても一向に構わないのだが、その地下基地に着くまでに舌を噛み切られては困る

。

「まあ、最終的には処分するんだけどね。使える物には長生きして欲しいのよ」

長生きして欲しい。ここだけを聞けば良い言葉なのだが、『使える者』ではなく『使える物』とは 何より物扱いとは、冷酷である。そして結局は処分する気でい

る。

処分に対して異論は無いのだが。それをさらりと口にする塔画の根性には仲間ながら恐怖を禁じえない。

「それが居れば充分だわ。幻不、それ（・・・）連れて廊下に出てくれる？」

物の次は『それ』呼ばわり。この最早捕虜と呼ぶべきだろう障害も、可哀想だ。しかしそれは仕方のない事。幻不は確保した捕虜を引き摺り、言われた通りに廊

下に出た。

塔画も廊下に出ると、左手をリビングの中に翳す。突然、指先に白い靄が生じた。それは一本一本の蜘蛛の糸に似た細く柔らかな物となり、空気中に散らばる。

「ねえ。貴方」

塔画は屈みこんで捕虜と眼を合わせた。

「この糸はね、わたしが一番好きな武器なの。無間琴むげんきんって言うんだけど、音を奏でる以外にも使えるのよ」

見ていてね、と塔画はリビングダイニングを指差す。捕虜がそれに従って眼を向けた時、一番近くに倒れていた障害の手が跳んだ。

「この糸はわたしの意のままに操る事が出来るのよ。どんなに遠くに離れていてもね。細かい操作は出来なくなるけど、」

塔画は捕虜に顔を近づける。

「貴方の仲間を微塵切りにするくらい、造作も無い事よ。勿論、座敷にも張ってあるからね」

言ってる事分かるわよね？ 馬鹿じゃないんだから。

「わたし達を案内して頂戴」

3

「それで？　ここでもいいのか？」

捕虜が首を上下左右に動かして誘導したのは、階段下にある物置だっただった。

「嘘だったら、どうなるか分かってるわね？」

捕虜は必死になって首を上下させる。

「そうか。ご苦労」

物置の床にはベニヤ板が敷いてあった。それを引っ繰り返してみると、隕石が落ちたような形の悪い穴がある。

幻不はふと、足元に居る捕虜に眼をやった。脅えたような顔をしているが、塔画が穴を覗き込んだ瞬間、捕虜が微かに嗤ったのを幻不は見逃さなかった。

ドン！

突然、穴から炎が出た。しかしそんな罠の直撃を食らう塔画では無い。炎は塔画の頬に触れる直前で消滅した。

「嫌な奴」

火は二酸化炭素の中では燃えない。塔画は二酸化炭素で噴出した炎を押し潰した。

瞳を緑柱石に輝かせながら、塔画は捕虜に歩み寄る。

「待て、落ち着け。無駄な殺生はしないんだろ？」

「無駄ではないわ。それ相応の事をしたのよ。どいて。それに、最終的には殺すつもりだったんだし」

「退かない」

普段大人しい奴程、暴走して厄介な奴はいない。塔画がまさにそれだ。

「落ち着け。この程度はよくある事だ」

「貴女は沢山経験しているんでしょうけど？ わたしは初めてなのよね。填められるの」

「こんなもん、填められたうちに入らん！ ガキの悪戯みたいなもんだ！」

「……退かないなら、いいわ」

塔画は左手を翳す。その指先 人差し指と中指、薬指の三本に、燦銀の爪が嵌っていた。それを見て、幻不は青ざめた。

「止める！ 外せ！ その爪！」

塔画は返答しない。しかしいつもの幻不ならば実力行使に出るのだが、今は状況が違う。無暗に近づけば、たとえ幻不でも軽症では済まされない。

塔画は幻不の制止を無視し、燐銀の爪で空間を弾いた。幻不は咄嗟に両耳を塞ぐ。

その直後、幻不の背後にいた捕虜が消えた。恐る恐る振り返ってみると、そこにあったのは深紅の海。その中を、黒い粉が漂っている。それが、捕虜の頭髮の成

れの果てである事は人目見ただけで分かった。塔画の無間琴が、捕虜を切り裂いたのである。今頃、リビングダイニングと座敷の障害達も同じ姿になっている事だ

ろう。

「気が済んだか？」

無間琴の効果を知っているだけに、障害達が気の毒になった。

無間琴は、その音色を聞いた者に無限の苦しみを与える。肉体を失っても尚、苦しみは続く。いや、肉体の崩壊は苦しみではないかもしれない。一瞬で細切れ

になるのだから。肉体が崩壊すると同時に魂は苦しみの中に放り出され、転生も許されない苦痛の海を永遠に漂う事になる。それこそ、無間地獄だ。

殺しをする自分が、塔画に「殺すな」と言う資格は無い。しかし、見ているだけでも、苦手な武器だった。

「ええ。御免なさい。貴女、コレが苦手だったわね」

でも使いやすいのよ、と塔画は冷笑する。緑柱石の瞳には、まだ残酷な輝きが居座っていた。

「控えろ。この家が使えなくなったぞ」

「こいつ等が占拠したところで、使用不可能よ」

塔画が、穴を覗き込む。

「確かにそうだ」

行つて見るか？ 二人は顔を見合わせる。

「御免なさい。殺しちゃったから、」

これが本当の入り口かどうか分からない。そう語る塔画は、しだいに冷静を取り戻して行く。

「構わんさ。行つてみればいい。違ったら、引き返せば良いだけの話だ」

「戻れなくなったら、どうするの？」

「相変わらず、暴走した後は臆病になるんだな」

昔から、塔画は先程のようになった後は辺りを必要以上に警戒し、何かに脅える。無間琴を弾いた左腕が、小刻みに震えている。冷静

沈着であり、まとめ役であ

る事が自分の望ましい立ち位置なのではないかと思ひ込んでゐる故に、暴走後は不安で仕方がなくなるらしい。暴走など、自分がして良いものではないと思ひ込んでゐる

のだ。暴走する自分は自分ではないと。幻不はその思想を理解はしているが、対処は出来なかつた。専門外である。

「敵陣の中で、今更何を脅える？ 進まなければ、雷馬は死ぬぞ」

幻不は塔画の肩を両手で掴み、漆黒に色が戻りつつある瞳を覗き込んだ。

「さつさと元に戻れ。例えお前でも、私は戦力にならん者を排除する覚悟は出来ている」

元に戻らなければ切り捨てる。これは二度の人生を両方とも、戦場にある事を生き甲斐としていた塔画にとっては最も効果的な脅し文句だつた。

「戻るわ。あと少し……一分で、戻るから……」

「三秒しか待たん」

「分かつた」

塔画は額に手をやり、眼を閉じる。そして三秒黙り、顔を上げた。

その顔は暴走する前の、普段の冷静な塔画の顔。

「もう、平気よ」

「今度暴走したら、否応無く斬るぞ」

「反撃させて貰うわ。そのときは」

「上等だ」

幻不は穴に入り込む。塔画も、それに続いた。

4

穴の深さは五メートルはあるだろうか。着地したのは、白い床だった。しかも、フローリングではなく、リノリウムでもない。

「ゴム？ ゴム張り？」

「果たしてゴム床にする必要があるのだろうか」

「滑り止めかしら？」

「さてな。しかし」

幻不は自分の足元に目をやった。

「さつさと起きたらどうだ？」

そこには、床にうつ伏せになった塔画がいる。どうやら、着地の際に受身を失敗したと見える。

「敵陣では、即行・速攻・即逃走が鉄則なんだぞ」

「分かってる！」

「騒ぐな。気付かれる」

「もう気付かれているんじゃない？」

塔画が、よいしょ、と立ち上がる。

「そうかもしれん」

現在二人がいるのは、天井までの高さが五メートル、床の横幅が五メートルの廊下といってよい姿の空間がある。これが、細長い形の部屋なのだ、と言われれば、
「へえ、部屋なんだ」と、納得するしか無いが、部屋なのか否か、明確な回答が得られていない今現在では、ここは長い廊下の途中に落ちた、と考えるのが妥当

ではなかるうか。

二人の耳はふと、何かの音を拾った。幻不は一度しゃがみ込んで床を軽く叩いてみた。音が似ている。どうやら、何者かが廊下を駆けているのだらう。それも、複

数。

「来るわね。どうする？」

「倒すしか無かるう」

幻不が一点透視図法の最奥に眼を向ける。すると、武器を手にこちらに走って来る青い服を着た女達の姿が見えた。数はだいたい、三〇人弱。

「男達は腑抜けのくせに、女達は勇ましいな」

幻不はある程度系を出すとボビンの穴に結び目を作り、これ以上解けないようにした。まだ湿気が残る木綿の糸は、十分な強度を出せる。塔画は爪を外し、ウエ

ストポーチから硝子製の礫を手にした。女だからといって、手加減するつもりはないのだが、やはり女に殺傷能力の高い武器を向けるのは良い気がしない。

「侵入者め！ 排除してくれる！」

一番足が速いのだろう。一人が大群から飛び出した。

塔画は礫を放ち、彼女に直撃し昏倒させる。彼女を糸が襲い、無理矢理床に叩き付けた。高速回転するボビンが、彼女に続く女達の膝を叩く。それによって数

秒、脚を動かす事が不可能になり、彼女達は将棋倒しに転んで行く。二人はそれをひよい、と飛び越えた。

「勇ましいのは結構だが、」

「実力が追いつかないのね」

「まあ、仕方なからう」

空は思っていたより強くないのかもしれない。そんな事を考えながら、ゴム床の廊下を疾走する。今のところ、廊下は一本道だ。女達がこの方向から来たのだから

、この先に本隊が居るのだらう。まさか、あれが本隊ではあるまい。

「障害だ」

幻不がそれを見つけて存在を口にした時、塔画の目にもその存在が映っていた。それは先程のような大群ではなく、白髪の女が一人きり。あの女達よりも、実力

は上なのかもしれない。

「まったく。歩兵達は何をしているんだ」

その障害は軍服なのだろうか、同じデザインの青い服を着ていた。丁度、チャイナドレスとアオザイの間の子のようなデザインである。

「こんな子供二人に殺^やられるなんて」

その女は苛立たしげに剣を振り回している。

こんな相手に「殺してない！ 倒しただけだ！」と弁明しても聞き入れてはくれないだらう。実際、リビングダイニングと座敷の障害は息を止めてしまった。

「わたしの名は佐萌^{さめ}亜。李亨洲様の復活を妨げる者は全て排除する

！」

自己紹介して頂けるなんて！ 何て礼儀正しい障害さんなのだろう！ 二人が面食らっていると、佐萌亜は床を蹴って飛び上がった。

「下がれ」

幻不は塔画を背後に押しやり、自らも腰に潜めていたサバイバルナイフを抜く。

「その程度で！」

わたしの剣を受ける気か？！ 佐萌亜が叫んだ瞬間、火花が散った。

5

佐萌亜が繰り出す剣は、今まで倒してきた障害達のものとは異なっていた。

先ず動きが速い。使用している剣は長剣でレイピアのように細いものではない。ある程度の重量があるだろうその剣を、自在に操り、軽いステップで簡単に幻不

を壁に追い込む。

「逃げているばかりか？！」

佐萌亜が頬を紅潮させて叫んだ。しかし、この程度で殺られる程度では刃の長など勤まらない。幻不は首筋狙って繰り出された切っ先を、一撃で弾き返した。

思いがけない反撃に、佐萌亞は声を荒げる。

「子供のくせに！」

「子供だから弱い、なんて先入観は捨てるんだな」

痛い目にあうぞ、と言忠告を入れておいて、幻不はナイフの刃を外側に向けて水平に寝かせた。そして、突きに踏み出す。腕の長さ不足は速度でカバーし、

ナイフは佐萌亞の、人間であれば胃のあるあたりに埋まった。

「
！」

佐萌亞は音として現れない悲鳴を上げて、幻不がナイフを抜くと腹を抱えて横転した。傷口から、深紅の液体が噴出して、白いゴムの床に色を着けて行く。

「子供だからと侮るからだ。姿はコレだが、私は貴様より場数は踏んでいるんだ」

「おっ……のれえ……！」

佐萌亞は剣に縋って立ち上がろうとするが、

「無理すんな」

劳わる言葉を口にしつつ、幻不は佐萌亞を蹴り倒す。

「腹の傷は一ミリでも命取りになる。ましてや刃渡り十五センチのナイフが丸ごと刺さったんだ。死ななかっただけでも感謝するんだな」

睨み付けるような視線を佐萌亞に落としながら、口では矢張り労わる言葉を吐く。しかし、

「ぐっ」

幻不の靴の踵が、佐萌亞の傷口に当たった。踏み付けた、の方が正しいかもしれない。

「佐萌亞、と言ったか」

幻不は瞳を青鋼石に輝かせ、口元に残酷な微笑みを浮かべる。

「イニシマって、誰だ？」

6

いにしま《李亨洲》「名」異世界から来た空の元長。二〇年前に病死。現在双子の妹の柚亞仁を中心に、復活させる作戦が始まっている。

作戦其の一。『人間』の世界に柚亞仁のその側近達を転移。

作戦素の二。一族以外から高度能力者を選出し、長復活に使用する。

「へえ。お前達の長なのか」

「復活させるって、どうするのよ」

佐萌亜はその後、塔画の治癒能力で止血をして貰い、現在は無間琴に囲まれているうえに、幻不に頸動脈にナイフを突き付けられている。

「モンの中心に高度能力者を寝かせ、柚亞仁様が祝詞を唱えます」

状況が状況だけに、自然と口から出る言葉は敬語になってしまう。佐萌亜としてはこれ以上の屈辱は無いのだが、仕方が無い。相手が悪かった。

「ユア二？」

「現在の長で、李亨洲様の双子の妹様です」

「成る程ね。続けて」

「儀式は今日の午後五時から始まります。祝詞自体、早口で読んでも三時間は掛かる長いものですから、今の柚亞仁様の体調を考えると、五時間か六時間は掛

かかると思います」

早口で読んでも三時間掛かる、とは、その儀式は相当難易度の高いものだと考えられる。一度死んだ人間を生き返らせるのだから、簡単に出来るわけがないだ

ろっ。

「では、その間に奪還すればいいか」

「そうね。取り戻せば、ここにもう用は無いわ」

いつもと変わらない、テンション・プラスマイナスゼロの平静の状態で交わされる会話。しかし、佐萌亜にとっては顔をコバルトブルーに染め上げる程に、恐ろしい

ものだった。

「何を、奪うつもりなんですか？」

「奪うと言っな。人聞きの悪い。取り返すんだよ。拉致されたから」

「だから、何を？」

何と無く察しは付いていた。あの儀式に使う物で外部から調達して来る物は一つだけだ。

「お前がさっき言った高度能力者だろうな。それで間違い無い筈だ」

「ええ。何を基準にしてもあの子は高度能力者だわ」

塔画は邪も悪意も無い、愛らしい微笑みを浮かべた。しかし、それは今の佐萌亜にとっては恐怖の対象でしか無かった。

「い、生贄を連れ去る気か？！」

「当然だ。オマケみたいな人生だが、得した物を捨てる奴じゃない」

奴も、生贄になるのは不本意な筈だ。

幻不はわしり、と佐萌亞の胸倉を掴みあげた。正座した佐萌亞の身体が浮かび上がる。小さな身体からは想像出来ない程の腕力。

「道案内、頼めるよな？」

いいえ、出来ません。なんて言ったらどうなる事だろう。佐萌亞には、頷く以外に選択肢は無かった。

7

青い服の女性達によって、床に文字が書かれて行く。それは円を描くように書き進められているが、女性達は皆その円の中に入らないように書いていた。中に

入って書けば書き易かるうにとは思うが、それは違うらしい。書き易い書き難いの問題ではないのだという。

「これはモンですから。モンに最初に踏み込むのは贅でなければならぬのです」

その作業を眺めながら、琉葦芙は教えてくれた。式場作りを見学していた雷馬は、ああ成程と頷いてみる。

協力的に振る舞いながら、雷馬は焦っていた。何より、式場作りが始まったとなれば儀式まで、自分が生贄になるまでの秒読みが始まったといって間違いは無い

。このままでは、自分は殺されてしまう。食べられてしまう。これは参った。非常に我が身の危機を感じているのだが、どう動けば良いか分からない。

「どうなさいました？」

黙りこんだ自分の顔を、心配そうな顔をした琉葦芙が覗き込んでくる。

「いや。何でもないよ」

心配しないで、と言ってみる。

……参った。どうしたものか。

「ねえ。何時くらいに始まるの？ その儀式」

それより、今何時だろう。

「午後五時から始める予定です。現在三時ですから、あと二時間で仕度を整えないと」

急いで下さい、と琉葦芙は式場作りをしている女性達に声を掛けた。女性達は「はい」とは答えず、一斉に頷いた。どうやら、言葉を発してよい人と発してはなら

ない人がいるらしい。

そういえば、

「男の人はいないの？」

目が覚めてから、出会ったのは女性ばかりだ。

「男は生活の為に狩獵をするのです。長の身の回りのお世話や政治は全て女が行います」

それはまた、素晴らしい風習かもしれない。人間社会では、男女平等が叫ばれ始めて随分になる。しかし、未だに「女は家庭に入るべきだ」「女に政治は出来な

い」等の女性の仕事への偏見が男性達に見られる。子育てを母親ではなく父親が受け持つ等、例外も多々見られるが、やはりまだ男性中心の見方が強いらしい

。それに対し、男は狩獵、女は内政としつかり割り切つてあるのは、見事である。男が政治の全権を握り、太平洋戦争は起きた。一人でも女性が政治に携わつてい

たのなら、結果は変わつていただろう。未だ消えぬ男尊女卑は、日本人が全人類に恥ずべき点と言つて良いだろう。

雷馬はふと、壁と天井が交わる一点に目をやった。

雨漏り？

白く塗られた壁の一部。その部分だけに照明が反射しているのである。そんな一部分だけに、他とは違う塗料を使つとも思えないし空の文化が分からない

から、それも有り得るのだが　濡れているようにも見える。

そつといえば、目が覚める直前、水が滴り落ちる音を聞いた。目覚

めてみると水は落ちていなかったのだが。

雷馬は、その染みを暫し見つめていた。

8

「この道で合っているんだろうな？」

「合ってる！」

「罨に詰めようってんなら、止めておけよ」

「詰めない！　詰めないから刃物を下げて！」

二人は佐萌亞に武器を突き付けて、儀式が行われる部屋まで道案内をさせていた。

しかし、まるで蟻の巣である。そこかしこに部屋があり、廊下が何処までも続いていると思えば小さなドアを開けば、細い階段が下に伸びている。現在は幅が十メ

ートル弱の大きな階段を下っている。何処まで歩いても床も天井も白一色で、気分が悪い。

「随分、下って来たんじゃないか？」

階段は今まで二〇程下って来た。それは全て階段よりも壁に梯子を取り付けたようなほぼ垂直に近い急勾配のもので、段数は八〇を超えていた。それ一つでも

結構な距離なのに、それが二〇も繋がるのである。現在地も、相当深い場所なのかもしれない。

「よく、こんなもんを造ったな」

「床はゴムが貼ってあるみたいだけど、壁とか天井とか、何で出来ているの？」

コンクリートにしても木にしても、これだけのものを造るとなると相当な量が必要とするだろう。果たして、幾ら掛かっているのか。そして、何処から持ってきたのか、

も重要になってくる。

「これは、地中に穴を開けて上下左右を硬化樹脂で固めてある」

「コウカジユシ？」

ウレタン樹脂の仲間だろうか。

「わたし達の世界にある木の樹液を固めたものだ」

「へえ」

幻不は壁に触れてみた。確かに、コンクリートよりも軟らかいし、木よりも冷たい。

「塗装は？」

「樹液自体がその色なんだ。床には、軟化樹脂が上塗りされている」

「ゴムじゃないんだ」

塔画が踵で床を叩く。顔面をぶつけたので感触はよく覚えているが、限りなくゴムに似ていた。

「それで？ あとどのくらい下がれば良いんだ？」

「階段は、あと一つ。あとは坂道になってる」

「坂道？ スロープがあるのか？」

「今流行りのバリアフリーってやつかしら」

では今までの危険な階段もスロープにすれば良かったのに。何故そんな中途半端な事をするのだろうか。

「全部スロープだったら、車輪で転がれば済んだのにな」

「車輪って、あの、ローラースルー・ゴーゴー？」

「キック・ボードと呼んで欲しいな」

同じでしょ？ と言う相方に幻不はただ苦笑いした。

佐萌亜が最後だと言った階段を下り終わり、二人は揃って顔を顰めた。佐萌亜も、二人の気持ちが分かったと見える。

幻不は、無意識のうちにすっかり深い溝が出来てしまった眉間を指で押し広げながら、

「え〜っと……」

どう反応すべきかと、一生懸命思索していた。

「佐萌亞って、言ったかしら？ 貴女」

それは塔画も同じだったらしい。

「……何でしょうか？」

二人の不穏な気配を感じ取ったのか、佐萌亞は頬を引き攣らせる。

「貴女は、この施設の建設に携わっていたの？」

「い、いいえ。わたしは、戦闘専門ですから」

「そう。それは残念だわ」

「携わっていると言ったら、お前、その女を殴っていただろ」

「当然じゃない。袋叩きよ」

塔画は顛に指を押し付けた。そして途轍もなく深い溜息を吐く。

「スロープって聞いたから、バリアフリーを連想したわたしが馬鹿だったわ」

「スロープと言ったのは私だ。佐萌亞は的確な表現をしたんだよ。坂道って」

「そうね。後で覚えてらっしゃい」

一般的なスロープというと、傾斜角度一三〇度くらいの緩やかな坂道が五メートル程度あり、次に水平の面が五メートルあり、また坂道が五メートルある、といった

具合に、傾斜と水平が交互に続いているものだ。しかし、流石異世界の文化、といったところ。こちらの常識は無効と見える。

目の前にあるのは　あくまで目算だが、傾斜角度六〇度の、巨大滑り台とも取れる見事に危険なスロープだった。しかも幻不の高い視力を持っても、果て

が見えないと来ている。

「いやあ。これを車輪で下っていったら、さぞ楽しいだろうなあ」

塔画は原因不明の怒りに燃え、幻不はすっかり自棄^{やけ}になっている。

「何考えてるのかしら、ここの設計士。信じらんないわ。モーグルのコースだってこんなに角度は無いわよ」

「まあ、良いじゃないか。面白いんだし」

「貴女ねえ……」

溜息を漏らす塔画だったが幻不が上着の前を閉じ始めたので、仕方なくウエストポーチの位置をずらした。

滑り降りるしかないのだ。

駆け下りたとしても、どうせすぐに同じ状態になるだろうし。若しかしたら怪我をしてしまうかもしれない。この先どんな障害が待ち構えているか分からない今、動き

を制限させられては堪らない。

三人は水平と斜面の境界に腰を下ろし、手で床を叩いて飛び出した。

「& a m p ; # 8 2 5 2 ; ,」

すぐに、上に押し上げられるような浮遊感に襲われた。ジェットコースターの急降下感覚に近い。

床に触れる箇所が、摩擦で高熱を持ち始めた。噴き上げる気流により、呼吸が困難になる。このままでは窒息してしまう。そう思った時に、斜面は水平と交わった

。そしてそのまま慣性の法則に従い水平面を二百メートル近く走ってから、我が身は停止した。

「はい。到着」

安堵の溜息を吐いて、塔画は立ち上がる。着衣の後部が、摩擦によって光沢を帯びていた。幻不も尻から背中に掛けて上着が輝いている。

「富士急のフジヤマよりもスリリングだったわ」

「だろうな。いやあ、機会があれば車輪を用いて再戦したいね」

爽やかに笑う幻不の足元で、佐萌亞が青い顔をして蹲っている。最初は、「まあ、あの後だし、仕方無いか」と思ったが、どうも、様子がおかしい。

「どうした？」

顔中に脂汗まで浮かされては、矢張り心配になる。

幻不は佐萌亞の顔を覗き込んでみた。具合が悪いのだろうか。

「お前達、」

佐萌亞は服の胸の釦を握り締める。

「気を付ける。ここから先には、本隊が控えている」

「そうか、漸く本隊の登場か」

「何を呑気に！ お前達は充分強い！ だが、」

「わたし達より、強いのか？」

佐萌亞は激しく頷いた。

「ただ強いだけじゃない。冷酷で、例え仲間であつても、負けた者は容赦なく殺す。数が多いから、囲まれたら命は無いぞ」

「それを私達に教えて、どうするんだ？」

天馬・イツが空の存在と伝えてきた理由は分かる。空に幻不達を殺されるのが嫌だったのだ。しかし、佐萌亜は違う。元から殺すつもりだったのだから、このまま

本隊が来るのを待って、二人を差し出せば勲章の一つでも貰えるだろうに。

「わたしは剣士だぞ」

「それがどうした？」

「お前も剣士ならば分かるだろう。自分よりも強い敵には、簡単に死なれては困る。お前はわたしが会ってきた中で最も強い剣士だ。だから、あんな、数で相手を

潰そうとする本隊の奴等なんかに、殺させたくないんだ」

自分より強い奴は自分が倒す。自分以外の者に殺させはしない。自分達と天馬の関係と同じではないか。

「それが、お前の騎士道か。ならば、約束しよう。佐萌亜」

「約束？」

「ああ、そうだ」

幻不は、まだ床に這い蹲っている佐萌亜に右手を差し出した。

「私は本隊なんぞに殺されない。たとえ、その本隊が私達より強くても」

約束しよう。そう言う幻不の瞳を、佐萌亜は少しの間見詰めた。戸惑いを含んだ瞳は、しだいに確信を得る。そして、よろめきながらも自力で立ち上がり、佐萌亜

は幻不の手を握った。

「約束、だぞ？」

「ああ。何より、私達はお前達が拉致した仲間を取り戻すまで死ねないからな」

「死ぬ気はないもの」

微笑を浮かべて二人を眺めていた塔画が、顔を長く続いている廊下の向こうに目を向けた。途端に、佐萌亜が顔を更に青くする。

大気を揺るがす、低い音がこちらに迫って来ていた。本隊の登場である。

9

視界が白く濁る程に焚かれた香。その匂いは甘い。しかし、甘い匂いも度が過ぎれば刺激臭となるのだと、雷馬はこのとき初めて知った。

「ゲッホ！」

あまりの匂いに、雷馬は咳き込む。

「な、何なの？ この匂い」

「瑪品めほんの木を乾燥させたものを燃やしています。儀式の前に、この部屋の空気を清めているんです」

「メホンって、そっちの香木？」

「はい。貴重な物ですから、特別な時にしか使いません」

特別な時。確かに特別だ。若しかしたら、これが雷馬の人生の最後になるかもしれないのだから。

まいったなあ。

雷馬は内心、頭を抱えた。

そのときだった。

「琉葦芙様！」

儀式の行われる部屋に、亞灑亞劉が飛び込んで来た。

「どうしました？」

「侵入者です！ 地上の男達が惨殺され、歩兵達も倒されました。佐萌亜が人質に取られている模様です！」

侵入者？

「まさか！ 何故此处が分かったの？！」

「現在最下層に来ているらしく、本隊を向かわせました。しかし、」

「そうですね。始めましょう」

琉葦芙の決意の瞳が、雷馬を写した。

第四章 二十四時間闘えますか？

第四章 二十四時間闘えますか？

1

「之^{ゆな}之^な 佐萌亞。その者達を引き渡しなさい」

本隊の、隊長らしき灰色の髪的女性が厳かに言った。之^な之^なとは、多分、佐萌亞の苗字なのだろう。

「之^な之^な 佐萌亞」

佐萌亞は、ぐっと唇を噛む。そして、一度蹲ると靴の踵から細い針を一本引っ張り出した。それを、

「佐萌亞！」

何をするのか分かってしまった幻不と塔画は、同時に彼女の名を叫んだ。

「わたしはこの者達に破れ、命を救われました。空^{そら}の戦士として、柚亞仁様の騎士として、失格です」

「貴女が、その二人を引き渡せば、その必要は無くなりますよ」

「いいえ」

佐萌亞の意思は強いらしく、隊長の言葉にも耳を貸さない。

「やめろ、佐萌亞。必要無い。さつき約束したじゃないか。私達は死なないって。こんな奴等には、絶対に殺されない！」

堪らず、幻不も説得を始める。

「これは、わたしのけじめだ。空の民としての」

説得も叶わず、佐萌亞は針を首に突き刺した。

佐萌亞は一度天を仰ぎ、ぶるり、と身体を震わせると泡を噴いて前のめりに倒れた。

「佐萌亞！」

駆け寄って抱き起こしてみるも、既に佐萌亞に息は無かった。あの針には、強い毒が塗られていたのだろう。針の刺さった部分からは、深紅の筋が一つ鎖骨に

向って走っている。

「そんな」

けじめ。それは分かる。敵に情けを掛けられて恥をかくよりは、自ら命を絶つ、なんて、珍しい事ではない。しかし、

「目の前でされちゃあな」

流石に応える。幻不は微かに自分の頬が緩むを感じた。あと数分でも佐萌亞との付き合いが長ければ、或いは涙も零していたかも

しれないが。今は、苦し紛

れの笑いだけ。塔画は佐萌亞の傍らに片膝をつき、俯いて唇を噛んでいる。

佐萌亞の亡骸に向かってしていると、自然に本隊に背を向ける形になる。ここで隊長が幻不の首を目掛けて剣を振り下ろしたのだが、幻不は簡単にそれを右腕で防

いだ。刃を掴み、軽く力を込めると、隊長の剣は粉々になってしまった。

「まあ、仕方が無いか」

狼狽する隊長を背中に、幻不は佐萌亞に手を合わせると、すっと立ち上がった。

「お前がけじめを守ったのならば、私もお前との約束を守ろう」

殺されはしない。佐萌亞との約束を胸で唱え、幻不はサバイバルナイフを抜き、塔画は爪を填めた。

「掻き鳴らす気か？」

「有名な格言にあるじゃない？ 殺^やられる前に殺^やれって。それとも何？ 佐萌亞が自分より強いって言ってた奴等に手加減して、約束破る気？」

「いいや。そうだな、仕方ない。佐萌亞の弔いに、」

幻不はスラックスの右ポケットから、バタフライナイフを取り出す。

「大量殺戮と行こうか！」

幻不が床を蹴って跳び上がり、何十列にもなって並んだ本隊の中に飛び込んだ。両手のナイフを逆手に握り、右足を軸にくるりと一回転。飛び散る深紅と倒れる

兵隊。一步踏み出し、目の前に居た兵隊の喉元にナイフを突き刺す。接近戦は速度が命。身軽に飛び跳ねながら、次々と兵隊を血祭りに上げて行く。

塔画はぎりぎりまで相手を引き付けてから、無間琴を爪弾いた。音も無く、兵隊の身体は見事にパズルになる。

2

「しゃんしゃんしゃんしゃん」

七人の女性によって鈴が鳴らされ、

「しゃんかしゃんかしゃんか」

別の七人の女性によって錫杖が振られる。

あの後直ぐに、瑪品の煙で曇った部屋の中で儀式が開始された。雷馬は床に書かれたモンの上に、身体に空瑪を絡み着けられたまま寝かされ、純白の装布を

纏った琉葦芙に見た事の無い植物の枝で身体を撫でられていた。

突然頭の上のドアが開き、誰かが式場に入って来た。琉葦芙がその人の足元に跪く。

柚亞仁？

頭はそのままで眼球だけを動かし、雷馬はその人の姿を見た。

「！」

先程会った柚亞仁は、白い布で台に括り付けられていたが、頭の上に立っていたのは、白銀の髪を肩に流した蛋白石色の瞳の女性だった。二〇代後半の、気

の強そうな女性。あの、双子の片割れの名前を叫んでいた少女と同一人物だとは思えない。

柚亞仁が薔薇色の唇を開いて、

「」

何かを喋った。

「」

何を言っているのか分からない。雷馬の耳には、呻き声にしか聞こえなかった。その呻き声が、止まる事もなく続けられる。女性の声ではあるのだが、聞いている

と意識が沈んで行くような、身体が重くなって行くような。決して心安らかにはならない。寧ろ不快ですらある。

「
」

それが、どのくらい続いただろうか。体内時計もすっかり狂ってしまった。頭が重くなって、物を考えるのも億劫になってくる。

ううううううううううう。

甲子園のサイレンのような、ダムの放水警報のような、嫌な音が聞こえて来た。出所が何処なのか、確かめようとは思えない。背中が熱くなって来た。床が熱せら

れているのかと思った。しかし、床に触れている手は熱を感じない。

うううううう。

しゃんしゃんしゃんしゃん。

しゃんかしゃんかしゃんか。

「
」

サイレンと鈴と錫杖と呻き声。それだけでも充分不快なのに、今度は床が波打ち始めた。胃の中がぐちゃぐちゃと混ぜられて、気持ちが悪い。

最悪。

薄れて行く意識の中で、雷馬は本音を吐き捨てた。

3

あれから、三時間は経っただろうか。

「畜生」

幻不は舌打ちした。負けているわけではない。けして負けてはいないのだが、数に差がありすぎる。こちらは二人なのに対し、相手は倒しても倒しても廊下の向こ

うから湧いてくる。

「何人居るんだ。この兵隊」

風を切って、鉛の礫が幻不の頬を掠めた。

「つたく……」

細い傷が走った左頬に手をやり、幻不は奥歯を噛み締める。後方に目をやると、塔画が奮戦していた。流石に大量殺人武器である無間琴でも、塔画の現在のの

体力では、この数は難しいと見える。

自分も塔画も人より体力はあるが、何時までも続くようでは、危険だ。

どうする？

幻不はその焦りを相手に覚られないように平静を装い、ナイフを握り直した。

それから三時間と二〇分が経過し、一度たりとも止まる事無く、戦い続けているというのに、全く終わりが見えない。

室温はそれほど高くないというのに、額が濡れる。

瞼に垂れて来た液体を拭った時、

「幻不！」

塔画の声が耳を突き、背後に気配を覚えた。振り向きざまに、相手の鳩尾に肘鉄を埋め込んでやる。

「背中に来るとは、卑怯な……。いや、こんな小物に背中を取られた私が未熟なんだな」

汗で張り付く前髪を掻き上げ、迫って来た者の肋骨の間にナイフを叩き込む。

ふわり、と鼻先を蜘蛛の糸に似たものが漂った。無間琴である。

「幻不！ 伏せて！」

塔画の叫びに従い、幻不は大人しく身を伏せた。塔画は弦を爪弾き、十メートル先までの障害を粉末にした。同時に、ぐらりと体勢を崩す。

「無理すんじゃない」

塔画の肩を掴んで転倒を防ぎ、再び奥から湧いて来た障害に舌打ちする。

「どっかに、水さえあればな。居場所は掴んでるっていうのに」

「水？」

「コップの水じゃあ駄目なんだ。川の水とか、雨水とか。上水道でも構わない」

しかし、辺りを見回してみても蛇口はおろか、窓さえ無い。

「畜生」

幻不はボビンを投げて、障害の頸動脈を切断した。障害は深紅を噴き上げながら首と胴を分けて倒れたが、確実に、糸の速度が落ちて来ている。

「こうなるんだったら、港で拾っておけば良かった」

幻不は倒した障害の獲物を拾い、死体を飛び越えて来る障害の軍団に飛び込んだ。他人の剣は、矢張り使い手の癖が着いている為に腕に合わない。これでは

入手して一週間のナイフの方がまだ使い易い。しかし、ナイフで接近戦をやる程の体力は残っていなかった。

依然として障害の数に終わりは見えない。

能力を発動させようか。しかし、能力は体力を大量に消費する。今の状況で使っては、相打ちになる。それでは意味が無いのだ。こちらが生き残らなくては。

その時、大気が後方に流れた。窓の無いこの空間で、物体が動かない限り大気は動かない。障害は迫って来ているが、それのよって起きた動きではなかった。

「馬鹿！ 止める！」

塔画が、両手に大気を集めていたのである。大気は凝縮され、球体を成す。

放たれた大気の弾丸は高速で障害にぶち当たり、一列縦隊に並んでいた障害の心臓部分に風穴を空けた。続いて幻不が剣を飛ばす。一本で一人しか始末出

来ないが、この際贅沢は言っていられない。

一度後方に目を向けると、水を頭から被ったのかと錯覚する程に身体を濡らした塔画が、壁に寄り掛かっていた。

「塔画！」

「気にしないで。大丈夫よ」

「信じられるか！」

「わたしの心配をする体力があるなら、倒して頂戴」

確かにそうである。

幻不は足元に刀身が日本刀に良く似た剣を二本発見し、拾い上げた。ナイフより長さのあるこれならば、充分数を稼げる。使い慣れない両刃より、幾分使い易い

だろう。

「少し休んでろ」

呼吸を整え、床を蹴る。首を狙って剣を振り、次々と斬首刑に上げて行く。悲鳴を上げようとも、障害の一人がボーガンを放って来ようとも構わない。体液を頭から

被りながら、斬って棄てる。攻撃は最大の防御、とばかりに幻不は殺戮に及ぶ。

相手が天馬であつたなら、相手の死後の事も考えただろうが。相手が違う為に何も感じない。ただ、稽古の藁束を斬るように難いで行く。

そこで、障害の体臭でも深紅の匂いでもない、全く違う匂いがした。愛着のある、何よりも身近な匂い。

これは！

幻不は天井を見上げた。

天井と壁の交わる部分に、明らかに色の違う部分がある。匂いは

そこから漂って来ているのだ。

幻不は歡喜に頬を染めた。

地下水！

塗装の間から地下水が染み出している。

「三秒ばかり頼めるか？！」

「了解……！」

塔画は無間琴の弦を発する。幻不は、その染みに糸を刺した。そして念じる。

「ここだ。来い！」

我が魂の従者、

「晶鬼！」
しやうき

その叫びの直後、染みの中から光輝く一振りの刀が姿を現した。

柄は白銀で蔦が絡まったような細工が施され、燦銀の鐔には瑠璃、翡翠、珊瑚、琥珀、真珠の粒が填められている。柄尻から垂れた漆黒の紐には、円盤型に

切り出された瑪瑙が着けられているが輝いているのはその石達ではない。清水の如く、透き通った刀身だった。

晶鬼は楨永と同じく、鋼雅の死後行方を晦ましていた。しかし幻不がこの世界に転生したと同時に剛神から降りて来て、水の中で幻不が呼ぶのを待っていたの

だ。港で幻不が触系で探っていたのは、これの居場所。

何百年も待ち続けた使い手との再会を喜ぶ暇も無く、晶鬼は戦闘に突入する。

刀身に藍白色の炎を抱き、障害に向けて一振り。空を斬り、炎は氷点下三百度の衝撃波となって障害を焼き尽くした。液化した酸素が床を走る。

「うつ……」

汗の雫を落として、幻不の身体が揺らぐ。

矢張り、晶鬼を扱うには体力を消耗しすぎていたようだ。

まあ、作業効率が上がったから良いとするか。

幻不は再び炎を呼び、晶鬼を振った。

晶鬼の導入で、確かに作業効率は上がった。一度に百人二百人と湧いて来ていた障害が、四〇人三〇人と数が減ってきている。兵隊のストックが底を付き始め

たと見える。

その時間こえた、違う音。

しゃんしゃんしゃんしゃん。

しゃんかしゃんかしゃんか。

金属音？

今まで聞こえなかったものである。

「何だ？」

「若しかしたら、佐萌亜の言っていた儀式が始まったんじゃない？」

「なら、もう一踏ん張りだな」

俄に活気付く。手の甲で汗を拭くと、笑みさえも現れた。

晶鬼と無間琴が、障害が仕掛けて来る前に処分する。倒れた障害を飛び越えて、金属音を追う。

「待てっ！」

辛うじて負傷だけで済まされた障害がボーガンを構えたが、二人は振り返る事も無く全力疾走。本当は一休みしたかったのだが、そうすれば雷馬が殺される。

ここまで来たのだ。死なれては困る。佐萌亜や障害達の死が無駄になるではないか。そう考えると、更に死なせるわけには行かなくなった。絶対に連れて帰る！

廊下は何処までも一本かと思っていたのだが、終に果てが現れた。

Ｔ字路である。

右か、左かどちらかなのだろうが。音は聞こえるのに、どちらが近いのか、判断が出来ない。

「どっちだ？」

「貴女は、どっちだと思う？」

「同時に獲物を向けて、音が近い方に踏み込んでみるか？」

呼吸を整えながら、幻不は晶鬼を構え、塔画は弦を張り巡らせる。

次の瞬間、粉末になったのは目の前の壁だった。

第五章 大将戦

第五章 大将戦

1

ドアの反対側。柚亞仁が顔を向けている壁が砕け、女達は思わず鈴と錫杖を止めた。

「何者だ！」

手にしていた鈴を下げ、琉葦芙が怒鳴る。幻不は、

「名乗る名など無い」

言い放って、塔画を伴い、つかつかとモンに踏み込んだ。

「近付くな！」

がちゅん！ 鈴が足元に飛んできたが、目も向けずに雷馬の髪に絡んだ空瑠を筆り取る。

「贅に触れるな！」

肩に激突した錫杖さえも無視し、雷馬の頬を叩く。

「起きろ。帰るぞ」

眉が微かに動いたのを見ると、雷馬を右肩に担ぎ上げた。踵を返

すと、行く手に琉葦芙が立ちはだかった。そして周囲をぐるりと取り囲む女達。

「何故、私達の邪魔をする？」

「あんた達が生贄にコイツを選ばなければ、殺さずに済んだんだ」

何を、はあえて言わずにおいて幻不が一步踏み出す。

「逃がさぬ！」

女の一人が幻不の左腕を掴んだ。幻不が腕を振りすると、女はモンの中心に転がる。

そして一斉に、他の者が顔を青くした。

「早く退きなさい！ 百瞑^{ゆみん}！」

百瞑と呼ばれた女は慌てて立ち上がったが、直後に肉片になった。

「そんな！」

「なんて事！」

女達が揃って同義語を叫ぶ。幻不は一切の興味を示さず、先程空けた穴に向かった。

「幻不、待つて」

塔画は、しっかり状況が把握出来たらしい。幻不の背中に手をや

った。

「何だ」

「ちょっと見てみなさいよ」

モンの中心に、百瞑の体液を巻き上げながら小さな竜巻が出来ている。そして女達がうろたえている。

そして、今迄突っ立っていた女が竜巻に向かって一歩、踏み出した。

「柚亞仁様！」

「いけません！」

女達が柚亞仁を抑えるが、柚亞仁の瞳は竜巻しか映していない。

「いこ、しま」

顔に歓喜の笑みを浮かべて、瞳に涙を溜めて。一歩一歩、柚亞仁は竜巻に近付いて行く。

「駄目です！ 柚亞仁様！」

「李亨洲様は同族の血を吞んでしまいました！ 近付いてはなりません！」

この慌てぶりは尋常ではない。

しかし、幻不にとっては他人事だった。破滅するならば勝手に破滅すれば良い。雷馬を無事に取り返せたのだから、ここには用は無いのだ。

「幻不、まずいわ」

「何が不味いつてんだよ。いいじゃねえか。こいつ等が生きようが消えようが、知った事じゃねえ」

「貴女、疲れて感が鈍ってるのね？ 正常時の貴女なら、わたしより先に気付いたんだろうけど。口調も完璧におかしいわよ」

さあ、どうだろうな。

そう呟いて何気なく後方に目を向けた時。柚亞仁が女達を引き摺りながら、モンに踏み込んでいた。女達が軽いのか、柚亞仁の力が強いのか分からないが、問

題はそこではない。

柚亞仁は女達を引き摺りながら両腕を広げ、そして、

「いにしまあ」

竜巻を抱き締めた。

「柚亞仁様あ！」

柚亞仁を羽交い絞めにしたまま、琉葦芙が悲鳴を上げた。柚亞仁は五体を引き裂かれ、竜巻に巻き取られる。半身を吸収して、同時

に力を得たのか、竜巻は巨

大化した。

幻不は咄嗟に左手で塔画の襟首を掴み、穴から廊下に跳ぶ。

間一髪。巨大化した竜巻は部屋に居た女達全員を引き裂き、吸収した。

竜巻はうねりながら、人とも、獣とも形容し難い姿に形を変えてゆく。そして、地上目掛けて、跳んだ。

地上には、人間がいる。何の抵抗力も持たない人間が。

「幻不！」

何とかして！ 塔画の叫びはよく分かる。しかし、

「何でも私に頼るんじゃないよ」

そうは思うが、仕方が無い。

幻不は、ずるり、と肩から雷馬を降ろした。

「おい、起きろ！」

肩を揺さ振って、頬に往復平手打ちと耳朶抓り。

「じらー！」

「ごつり、と脳天に鉄拳を落とした時、漸く雷馬が目を覚ました。

「あれ……？ げんぶ、ちゃん？ とうがちゃん？ なんで、ここに居るの？」

「説明は後です。それよりお前、私を輪廻の輪から外せ」

「え？」

意味の分からない幻不の発言に、雷馬は目を丸くする。しかし今は緊急事態。急がなければ。

「刃・優一族の魂を支配するのは、明一族にしか出来ない事なんだ。私の魂を開放しろ」

「やった事無いよ！ そんなの！」

「前世でお前の息子がやった。母親のお前に出来ない筈が無い」

無理矢理な理屈だが、今は出来なければならない。

「念じればいい。この身体じゃあ、能力も体力も足りねえし、今は、鋼雅の身体にならなきゃ市内の人間が死ぬんだ」

雷馬は、左手を幻不の額に翳し、目を閉じて念じた。何を念じればよいのか分からなくて、一応、鋼雅の姿を思い出してみた。

目に石の門扉が見え、自分の指先が鍵の形になって門扉の中心にある小さな鍵穴に填まる。左に捻ると、右脇を風が吹き抜けた。

その風と同時に塔画が見たのは、青い影だった。青い鎧に身を包み、晶鬼を携え、頂で一つに束ねた白銀の髪を靡かせて駆け抜けたのは、

鋼雅？！

武将・牙翊鋼雅だった。

2

竜巻　李亨洲が昇って行った天井の穴に飛び込み、李亨洲を追う。先程までの疲労感は消えていた。身体が突然成長したというのに、身が軽い。

進行方向に李亨洲の姿を見つけた。間もなく、李亨洲は夜空に飛び出す。

夜空に飛び出すと、槇永が現れて合流した。手綱を握り、高速で夜空を駆け上る李亨洲を追い駆ける。

飢えた李亨洲は空高く飛び上がり、遠くに煌めく街の灯に向かって身体を大きく広げた。

晶鬼の柄尻の瑪瑙が赤く燃え上がる。鋼雅は晶鬼を握る。刀身に咲いた純白の光。距離を詰め、一直線に晶鬼を振るった。

3

「大丈夫？　雷馬」

肩を組み、半ば引き摺るようにして塔画は雷馬と共に廊下を進む。
そこで思い出した。

あの急斜面を登るんだわ。

勘弁して下さい、と言いたくなったが、誰に言えば良いのか分からない。ああ、それこそ、女皇に言えばよいのか。

「言ったら、シナリオ書き換えてくれるかしら。女皇陛下」

書き換えてはくれないだろうな、と結論を出す。

魂の開放　つまり魂を、輪廻を経て手に入れた現在の肉体から取り外し、その魂があるべき器を時の彼方から召喚し、魂を納める。時間の法則も生命の理も

、全てを無視したレッドカードでは済まされない反則技。武芸に優れた刃と、智謀の優を統べる明は、剛神の魂の管理者である。

魂の開放は最上級レベルの術で、幻不を鋼雅に戻した雷馬は、その直後に倒れ、意識を失った。その為、今は塔画が二人分動かなければならない。

「幻不う」

地上に戻ったら人間が皆死んでた、なんて嫌だからね！　幻不が今戦っているだろう地上を見上げ、塔画は内心絶叫した。

「優の長殿？」

突然聞こえた女の声に、はっとして顔を上げる。その立っていたのはスマリだった。服は天馬独特の臙脂色の衣装だったが、顔は変わっていない。身体は替え

ていないようだ。

「貴女、どうして？」

「邪魔者の処分に来たのですが、粗方、片付いているようですね。貴女方の仕業でしょう？」

スマリは足元の転がった障害の頭を軽く蹴った。自分達と天空人以外は物・家畜以下、の思想を持つ天馬らしい動作である。

「刃の長殿は、どちらに？」

塔画は天井を仰いだ。

「地上よ」

「成程。ヒムル、ソウナ」

スマリが声を掛けると、背後で障害の首を切断しながら、遺体を廊下の左右に寄せていた二人の男が顔を上げた。

「お二人を地上までお送りして」

「いらないわ！ 情けは無用よ！」

誰が天馬なんかに助けられるもんですか！ 塔画の叫びに、スマ

りは気分を害した様子も無く、無表情で言った。

「それでは私達が困るのです。私達が此処に来たのは、貴女方を邪魔者達に殺させない為。大部分処分したようですが、まだ残っている可能性は充分にある。そ

の生き残り達に、今の貴女が勝てますか？ 若しお二人が殺されたとしたら、困るのは私達だけではないのですよ」

優と、明の臣と民。長が消えて最も被害を蒙るのは、この二つだ。

「ご理解して頂けたのなら、ヒムルとソウナに付いて行って下さい。ご安心下さい。休戦協定は守ります。もし邪魔者の生き残りがあった場合は、この二人が命に代

えてもお二人を守りますし、必ずや、安全に地上にお送りします」

「貴女は、どうするの？ スマリ」

スマリは天井を仰いだ。ただ単に天井を見たのではない。天井の遥か向こうにある、地上を見たのだ。

「刃の長殿を、迎えに行きます」

待っていて下さい。必ず、連れて戻りますから。

スマリの言葉が、塔画にはとても頼もしく聞こえた。

「分かったわ。絶対、幻不を連れて来てよね」

「約束しましょう」

それでは、とスマリは一礼し、儀式の行われていた部屋に入った。そこからあの穴を登って行くのだろう。

「此方へ」

ヒムルとソウナが手を差し伸べる。塔画はヒムルに背中 of 雷馬を預けた。

頼んだわよ！ スマリ！

そして再び、地上を仰いだ。

4

スマリは一度の跳躍で、地上に出た。

ここは。

式場の真上、穴の出口は商港にある広い駐車場の真ん中だった。

パレスニュータウンのあの家から、三キロ程離れている。そこま
で、あの基地は地下深く、広く枝を広げていたのだ。ここまで造る
のに、一体どのくらい時間が掛か

ったのだろう。奴等がこれ造っている間、何故気付かなかったの
だろうか。自分をもっと早く気付いていれば、明の長はあんな目に
遭わずに済んだのに。

スマリは内心舌打ちし、刃の長を探した。

すると、前方十時方向に、鷹とライオンとトリケラトプスを足してゴジラで割ったような姿の巨大なモノを、麒麟に跨った一人の戦士が追っているところを見つけた。

あれか！

街に向けて広がった異形の者は、多分邪魔者達の一つだろう。それを追う戦士が、剣を振り上げた。

白い光が一直線に異形の身体を走る。異形は光と共に爆発した。まるで星が消滅するような閃光。そのあまりに強烈な光に、スマリは目を細める。

「鋼雅殿！」

そして光の中で、戦士が落馬するのを見た。

駆け寄り、麒麟が拾いに来るよりも先に戦士を抱き留める。

「こうが……」

しかし腕の中にあっただのは戦士ではなく、小さな身体の、子供だった。

「長殿」

安堵の溜息と共に、スマリは気を失った幻不に微笑んだ。役目を終えた晶鬼は柄尻の瑪瑙だけ残り、漆黒の紐ごと幻不の左手首に

絡み付く。楨永は、宙を蹴

って漆黒の夜空へ跳んだ。

5

「ボロボロじゃん！」

幻不の目を覚ましての第一声がこれだった。

確かに、ボロボロである。上に羽織っていた上着の裾は豪快に裂け、ベストには斬り倒した障害達の体液が染み着いている。白かったワイシャツもベストと同様で

、スラックスからは血が滲み、裂け目からは火傷した脚が見えている。顔の右半分も、李亨洲が消滅する際の高温に晒されて、赤くなっていた。致命傷ではないに

しても、傷の数は十や二十ではない。

「千人斬りの後で充分体力を消耗しているのに、前世の身体に戻ったりするからですよ。その上あの大立ち回りをやったのでは、ダメージも絶大でしょう」

ここは、あの大穴の開いた駐車場。照明は、十数メートル離れたところを走っている道路の外灯しか無いので薄暗いのだが、二人にはそれでも充分だった。

幻不はアスファルトの仰向けに転がり、スマリはその横に立って

幻不を見下ろしている。

「大立ち回りってなあ……。そんなに暴れていないぞ？ 私は」

「麒麟を走らせるだけでも充分、身体に負担が掛かるんですよ？
その時の身体は『鋼雅』でも、元はその身体なんですから」

「敵のお前に説教されるとは、思ってもいなかったぞ」

幻不はスマリを見上げて笑った。

「今お前とやり合ったら、確実に負けるな。身体が全く動かないんだ」

「暫く、兵を休ませましょう。貴女はその有様ですし、私も、兵を増やさなくてはならないですし。何より、万全ではない貴女を倒しても、私は全く嬉しくはない。他の

者も、同じ意見でしょう。私の方も、貴女の方も」

「そうしてくれると助かる」

幻不は夜空を見上げて、深く呼吸した。夜の冷たい空気が肺に染み渡る。呼吸が出来るのは、生きている証だ。そして全身の痛みも、生きている証拠。

李亨洲を斬った瞬間、身体力が抜け落ちて、「ああ、死んだな」と、そう感じたのだが、こんな時に限り、いつもは全く嬉しくはない痛みも嬉しく感じる。

相打ちなんて御免だ。自分の命と引き換えに世界を守る、なんて柄じゃない。それは正義の味方にやらせておけばいい。幻不としては、自分と仲間が生きてい

なければこの世界などあっても無くても同じなのだ。

そこでポツリ、とスマリが語り始めた。

「貴女が、牙翊幻不が戦場に現れて初めて、我等は滅亡の危機に追い込まれました」

「何だ、いきなり」

「まあ、聞いて下さい。それから、五〇代後、牙翊鋼雅は娘・燐雅に長の座を譲ってから戦場に立ち続けて、再び長の部隊と私の部隊を含む七つを残して壊滅

しました」

昔話である。天空人なら三歳児でも知っている話。

「しかし、あと一步。あと一戦で滅亡させられるといった所で、貴女は重傷を負い、亡くなりましたね。牙翊幻不の頃も、牙翊鋼雅の時も」

「それがどうした。中途半端なところで死んで、私にとっては悔しくてしょうがない過去なんだ」

「今度の貴女は、」

その時、海風がスマリの唯一紐やピンで束縛されていない前髪を揺らした。

「私達を滅亡させますか？」

「させて欲しいのか？」

何をして腕が痛むので、腹筋だけで上体を起こし、挑戦的な微笑を浮かべてスマリを見上げる。スマリもまた、三十代の女の顔で笑った。

「強い敵がいるのは、良い事ですから」

「同感だ。敵は強ければ強い程良い」

今世も頼む、と右手を差し出す。スマリは払い除ける事もせず、右手を握り返して来た。

まったく、バケモノが化けた身体だというのに、憎らしい程、人並みの体温がある。そして手の弾力さえも、人間と同じだった。この姿の真の所有者はもう、この世

には居ないというのに。皮肉なものである。

「私は、貴女を何と呼べば良いのでしょうか。今は、人間の名前があるでしょう」

「名前、か？ 人に名前を尋ねる時は、自分から名乗るもんだらう？ 親しき仲にも礼儀ありってやつ」

矛盾しているような気もするが、この場合は特別だ。

「それは失礼しました。私は、ウエダフジコと申します。暫くこの身体と社会地位を使うつもりでいますから、名前は当分変わりませんよ」

「ウエダは、上方漫才に水田か？ フジコ？ 峰富士子か？ それとも、藤の花？ 不二か？」

「文月ふみつきの子供と書きます」

幻不そらは空に指を走らせた。上に田に、文月の子。

上田うえだ 文月子ふじこ。

「難解だな」

「そうですか？ 古風で、良い名前だと気に入っているのですが」

確かに、一時期の流行りに流された名前でもないし、個性的な漢字遣いには面白味もある。しかし、学校の出欠確認で、教師の誰か一人は読み方に首を傾げる名前だろう。

る名前だろう。

近年稀に見る名作だな、と幻不は感想を述べる。

「私の名前もお前に負けずと雅やかで良い名前なんだよ」

終章

終章

「だから、知らんと言っているだろ！」

次の日の雑居ビル。キッチンでコーヒーマーカーが良い香りを吐き出す中、幻不の怒鳴り声が響いた。

「そんな筈は無いんですよ。昨夜十時近くに商港付近で観測されたこの能力値！ これはそこの超能力者のものではありません！ 貴女は昨日の昼からパレス

ニュータウンにいらっしゃったんでしょう？ これは貴女のものなんじゃないんですか？！」

「知らん！」

今朝早く、雑居ビルにエ二が飛び込んできて、只管、その謎の能力値について語っていた。その能力値というのが、先程エ二が述べた通り、極稀に誕生する超

能力者よりも強く、それこそ神に値するものだったらしい。

丁度その日の昼間に力の波動が観測されたのがその近くだった事。そして幻不と塔画がそれを見るなり姿を消した事。以上の二点から、エ二はその力を幻不が

放ったものだとは断定した。

半分正解である。測定された能力値の半分は李亨洲のもので、また半分は幻不のものだ。しかし、正解だと言えば、この男は幻不を石榴の神子だと胸を張って

断定して拉致するだろう。それは御勘弁願いたい。

しかし、そうむきになっている事が肯定しているのと同じだと、そんな単純な事に幻不は頭が廻らない。

「シア様！」

「あのな、」

どうにも五月蠅いので、無理矢理、話の腰をへし折ってみる事にした。

「お前は私をシアと呼ぶが、お前は私の本名を知っているのか？」

「本名、ですか？」

えーっと、と、エニは空に人差し指で何かを辿り始めた。多分、家系図でも描いているのだろう。そうでもしなければ分からない程、幻不とエニは遠すぎる親

戚なのだ。

「伯母さんが嫁いで行った家が古田^{ふるた}で、伯父さんのお父さんの苗字が……？」

「分からのだな？」

幻不の無表情での問いに、ユニグマは返答に詰まる。凶星だったらしい。

「まあ、しょうがないか」

幻不は一度席を立つと、部屋の隅のカラーボックスから一枚、紙を持って来た。

「何？ それ」

雷馬も初めて見るものだった。B四サイズのもので、真ん中で二つに折っても構わないのだろう。紙の中心に折り目が走っている。

「一昨日の夜、私が作成していた文書だ。昼過ぎたら、出しに行くのに付き合ってくれ。エニ。親戚なら容易い事だろ？」

親戚という言葉に目を潤ませて、差し出された紙を受け取ると、更にエニの顔が明るくなった。

「シア様！ コレは！」

「え？ 何なのさ」

雷馬が紙を覗き込む。その紙に書かれていた文字は、

「転入届?!」

「しかも国立大学付属の中学校なんですよ！ レベルが高い、秀才

学校です！」

「悪いかな？ そんなに驚く事でも無かるうに」

「悪いも何も、」

キッチンから塔画が現れ、幻不に珈琲を手渡した。

「貴女に教育機関に通おうとする意思があるとは思わなかったわ」

そう言う塔画の顔が、何処までも呆れているものだから、少々嫌になる。

「心外だな。これでも、地元の公立小学校に籍はあったんだぞ？
今だって、この近くの中学校の学生名簿に名前はあるんだ」

塔画は訝しげに柳眉を寄せた。

「通ってるの？」

「小学校の入学式にすら出てない」

「何て早い登校拒否なのかしら」

入学式くらい出ておきなさいよ、と塔画はジャスミンティーを啜る。

そこで、転入届を凝視しているエニが目に入った。

「どうかされました？ エニさん」

「いえ、」

エニは転入届から目を離さずに言った。

「シア様、十三歳だったんですね」

「「は？」」

この声は塔画と雷馬のものである。

「それがどうした？ 私は正真正銘の十三歳だぞ。その二人と同じ年だ。まあ、雷馬は一月生まれだから同学年と言った方が正確かもしれない」

「そうなんですか？ いやあ、皆さん言葉遣いが大人びているものですから、つい、年齢を忘れてしまう」

そこで二人が動いた。

「そおだねー。幻不ちゃん、大人っぽいもん」

「子供のわたし達には真似出来ない」

間延びした、それこそ中学生の喋り方に切り替えた。どちらも現役の中学生であるだけに、発音まで正確に出来ている。聞く、真似る、使う。これがネイティブ

手順。国立であれ何であれ、中学校に通うにあたって自分もそうなるのかと思うと、幻不は頭痛を覚えてしまう。

「演技を始めるな、お前等」

一喝すると、ぷい、と顔を背ける。他人の話を真面目に聞かない現代の中学生そのままだ。

まったく、余計な事を覚えて来おつて！

これだから最近の若い者は、と今にも言い出しそうな表情で二人を軽く睨む。

「あの、シア様」

「何だ？」

エニが、転入届の本名の欄を指差す。

「コレは、『みこと』と読むんですか？」

本名の上に記入するべき、振り仮名を忘れていたらしい。

「いや、これは『たける』だ。シミズ・タケル」

「清水^{しみず} 尊^{たける}？」

「それが、貴女の今度の名前？」

雷馬がひよい、と顔を上げた。塔画も幻不の顔を見る。

「ああ。養父母の苗字は栗花落^{つばき}なんだが、矢張り両親の苗字を名乗りたくてな」

「いい名前じゃない。わたしなんて鍋よ」

鼎は確かに物を似る器である。しかし、塔画の両親はそんな意味を取って名付けたのではないと思うのだが。

「でも、三度目の人生飾るには、良い名前だと思ってるわ」

「そうだな。私も気に入っているんだ。清水の姓も、尊の名も」

「じゃあ、あたしだけ平凡だなあ。かつこ悪い」

雷馬は、ストローでグラスの中の氷を突き回しながら頬を膨らませた。

「たけのうち竹之内だよ？ 苗字」

「特殊なのが良いつてのはおかしいぞ。私の清水だってそれ程珍しい苗字ではない」

「でもさ、名前は不思議なんだよ。春はるか華」

「その何処が不思議だって言うんだ？ 良い名前じゃないか」

「そうじゃなくてさ、」

雷馬が言うには、春とは目覚めたばかりの生命を暖かく包み込み、母胎の優しい温もりのある季節なのだという。

「春に豪華な華は不似合いなんだって」

「貴女らしからぬ、詩的な見解ね」

雷馬らしからぬ、どころか、エニにしてみれば『十三歳らしからぬ』である。

今時の十三歳は皆、これ程までに詩人なのだろうか。これでは詩仙も詩仏も泣いて逃げるぞ。

呆氣にとられているユニグマの前では、知的で詩的な言葉の決闘が続けられる。

「前に『世界に一つだけの花』って歌が流行ったが、そのタイトル通り、全ての者が『世界に一つだけの花』なんだ。でもな、自分の娘にはその花達の中でも最も美

しい、世界の華になって貰いたいと願うのは女兒の親としては普通なんじゃないか？」

「でも、春は？」

「不景気だろうと温暖化だろうと、人の世なんか万年春真っ盛りなのさ。花が咲かない季節があるか？」

饒舌で、武人らしからぬ詩的な言葉を吐く。まるで気障な男の口説き文句のようだ。

「冬？」

「冬は雪が花だろう？ あそこまで白い花が、どの季節に咲くと言

うんだ？ 星も花になるぞ？ 見事な漆黒の闇はそれだけで美しいじゃないか」

「うづむ。成程」

詩の無い歌合わせは刃の長が勝利したらしく、完敗です！ と雷馬は両手を掲げた。

「そう考えてみると、結構欲深い名前かも。ねえ、エ二さんの本名は？」

「へ？！」

突然話を振られて、エ二は驚いて跳び上がった。

「いえ、皆さんのような、立派な名前ではありませんよ」

「それは御両親に失礼だぞ？ 若しくは、名付け親の方に。その名前を上げるが落とすかはお前の行い次第なんだから。お前が立派であれば名前も評価されるし、お前がその程度であれば名前の評価もその程度だ」

エ二は、さてどうしたものかと鼻の頭を掻いた。しかし意を決し、本名を口にしてみる。

「小久保^{こくぼ}、ケイシロウです」

「下の名前は？ どんな字を書くんですか？」

塔画の問いに、エ二は自分の掌に書きながら説明した。

「ケイは、蛍。シは志しで、ロウは朗らかです」

普通は、浦島太郎の郎なんでしょうけれど。

「それもご両親の意図だ。いいじゃないか。素晴らしいと思つぞ。志しを持つ蛍の如く輝く朗らかな者」

そんな良い名前なんだからさ、

「エ二なんて片仮名名前なんか名乗るなよ。勿体無い。私も、シアとは名乗ろうと思わないからな。私には清水尊つて名前がある」

それはある一種の引導であつた。私はお前の元には行かない、と。

「私にはやるべき事があるからな」

幻不はそう言い残して、キッチンの奥に姿を消した。

その背中を呆然と見送るエ二に、塔画が声を掛ける。

「仕方無いんですよ。これから、あの人もわたし達も危険な橋を渡る。あの人は極力、巻き込みたくないんです。特に、親しい人は」

両親が殺された今は、たとえ血の繋がりが皆無であつたとしても、親戚と呼べる者は失いたくはない。

「ふられた、のですか？ わたしは」

「そうかもね」

氷が解けて味が薄くなってしまったアイステイーを、雷馬はグラスに直接口をつけて飲み干す。氷もそのまま飲み込んだ。

「そろそろ支度して頂戴。春華」

「うん」

人間の本名で呼ばれた雷馬は席を立ち、衝立で仕切った隣の部屋から白い猫のキャラクターが描かれたビニールシートを持って来た。

「これから、お時間あります？ 蛭志朗さん」

「ええ。今日一日、オフですが」

それが何か？ そう尋ねようとしたとき、キッチンから幻不が現れた。胸に、巨大なバスケットケースを抱えている。

「行くぞ、蛭志朗」

一度テーブルにバスケットを置くと、幻不は上着を羽織った。同じ物を何着も所有しているのだろ。昨日着ていた、裾の長いワイシャツと同じデザインである。

「どちらに？」

「花見。西に城跡があるだろ？ あそこの藤棚が見事だな。鼎が言うには、今が丁度見頃なんだとさ」

ほら、行くぞ。幻不は上着の裾を翻す。左耳の深紅の雫が、窓か

らの光で輝いた。

エニ 蛍志朗は立ち上がると、三人の背中を追いかけた。

了

終章（後書き）

この話は自分が幼少の頃に行っていた『ごっこ遊び』から誕生した話です。

当時好きだったものや感銘を受けた作品の影響を大きく受けながら、自分なりに進化をさせました。

赤青緑の色の配分は多分『レイアース』から。天空は、『天空の城ラピュタ』だと思います。前世云々は『セーラームーン』。

雷馬と塔画にはモデルになった人物が居まして、自分の友人です。あの二人と遊んでいる間の自分のポジションが幻不でした。

幻不は、自分の理想の姿です。ただし、こんなに酷い人にはなりたく無いですね。何故だろう。何故こんな人になってしまったんだろう……。

幻不・雷馬・塔画、そして天馬達の物語はいつか完全な形にしたいと思っております、無数に枝分かれした話を纏めようとしております。

きっと壮大な物語になるだろうと思います。

この物語に『現代地上神話』と名前を付けたのは自分がこいつ等と同じ年齢の頃。最初は『新世界』と名付けるつもりだったのですが、そして話もタイトルに沿った内容にする予定でした。しかし当時親しくしていた知人にパクられてしまい、断念。

いつの日かもっと進化した『現代地上神話』を御披露目出来るように頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6441g/>

現代地上神話

2010年10月9日20時37分発行